

内裏造宮関係基礎史料集

二〇二三年度東京大学史料編纂所一般共同研究
「中井家文書」の建築指図と帳簿類の総合研究」

目次

| | |
|---------------------------|----|
| 「御造営御用承知帳」翻刻 | 1 |
| 「慶応元年從十一月良隅御取広御用帳」翻刻 | 32 |
| 『良隅御築地御取広并花御殿御模様替御用掛雑記』翻刻 | 44 |

例言

本書は、東京大学史料編纂所二〇二三年度一般共同研究「中井家文書」の建築指図と帳簿類の総合研究（代表・海野聡）による成果を報告するものである。この研究は、宮内庁書陵部所蔵「京都御所造営関係文書」（江戸時代の京都大工頭中井家で作成された資料群「中井家文書」が多くを占める）のうち、既公開の寛政度・安政度造営分を主たる検討対象としたもので、二〇二二年度一般共同研究「中井家文書」を中心とする建築関連史料の高度資源化と活用（代表・海野聡）とも密接に関わる。また両共同研究は、科研費・基盤研究（A）「東アジアにおける工匠関連史料にもとづく建築生産史の再構築と技術蓄積・伝播の解明（二二H〇〇二二二）」（代表・海野聡）とも協業しつつ、建築指図や帳簿の読解・検討を進めてきた。

検討を行うなかで、「中井家文書」を十分に活用するためには、主たる作成者である大工とは別の視点からの史料と比較し相対化することの必要性を強く感じた。そこで本書では、寛政度・安政度の内裏造営に関する基礎的な情報を持つ史料として、宮内庁書陵部図書寮文庫所蔵の①「御造営御用承知帳」、②「慶応元年從十一月良隅御取広御用帳」、および宮内公文書館所蔵の③『良隅御築地御取広并花御殿御模様替御用掛雑記』を翻刻する。①・②は、すでに藤岡通夫『京都御所』（彰国社、一九五六年）にも使用されているものであるが、全文が翻刻されたことはなく、所蔵番号等が一般には認知されていないようであるので、今回の翻刻には大きな意義があろう。

翻刻文は、①については新井重行が作成した。②・③については萩原まどか氏（東京大学大学院工学系研究科・博士課程）が作成した原稿を、新井の責任で調整した。原稿作成に当たっては、糸賀優理氏（東京大学史料編纂所學術専門職員）の協力を得た。

略解題

①「御造営御用承知帳」は、図書寮文庫所蔵『造内裏並遷幸一会』（函架番号五一五―二、全二一点）のうちで、寛政度の内裏造営に関わる記録。御指図御用掛による作成とみられ、記録期間は寛政元年（一七八九）三月～十二月である。藤岡通夫『京都御所』（前掲）では寛政度の「資料Q」として紹介されている。また詫間直樹編『京都御所造営録―造内裏御指図御用記（一）』（五）』（中央公論美術出版、二〇一〇（二〇一五年）においては、修理職奉行衆と御指図御用掛との間で、頻繁にやり取りされる帳簿であることが指摘されている。なお本史料の性格については、新井重行「寛政度内裏造営に関する史料の検討―承知帳・伺帳を中心に―」（『禁裏・公家文庫研究』第八輯、思文閣出版、二〇二二年）も参照されたい。

②「慶応元年從十一月良隅御取広御用帳」も前掲の『造内裏並遷幸一会』のうちであり、慶応元年より内裏東北隅を拡張した造営事業に関する御普請御用掛の記録。記録期間は慶応元年（一八六五）十一月～同三年四月である。藤岡通夫『京都御所』（前掲）では、安政度の「資料T」として紹介されている。

③『良隅御築地御取広并花御殿御模様替御用掛雑記』（識別番号三四三三六、一冊）は、宮内公文書館の所蔵にかかる謄写本（臨時帝室編集局作成）で、②と同一の造営事業にかかる記録である。表紙見返しには、原本所蔵者や採取者の情報とともに、これが御普請御用掛梅溪通善の手記で、原本は「表紙共半紙、七十八枚綴」であることなどが記される。記録期間は、慶応元年十一月～同二年十二月であり、②・③は内容的に重複するところが多いが、相互に比較すると記事に出入りがあり、お互いに相補う関係にある。なお本史料には、意味がうまく通らず、謄写の誤りかと疑われるところもあるので注意されたい。なお②と比較して、人名などに最低限の校訂注を付した。

「御造営御用承知帳」翻刻

〔凡例〕

- 一、本稿は「御造営御用承知帳」（宮内庁書陵部図書寮文庫所蔵『造内裏並遷幸一会』、函架番号五一五―二、全二一点のうち）を翻刻するものである。
- 一、翻刻は通行の方針に倣う。
- 一、改行は底本のままとする。
- 一、文字は通行の字体に改め、読点および並列点を加える。
- 一、改丁の箇所には「」を付し、丁数を示す。

（二〇二四年五月補訂）

〔翻刻〕

（表紙）

「寛政元年酉三月

御造営御用

承知帳

勢多大判事

土山淡路守

市野伴之進

岡田権太夫

松宮主水

高嶋監物」

壺

（本文）

一、妻戸図 壺枚

右被出、六葉金物定木絵之處絵可上事、

尤金物木形之通、金物数四ツ、

本紙添、

一、引手釘隠金物絵 式枚

右写可上事、

右之通被仰渡承知仕候、明日差上可申候、以上、

酉三月朔日

「（1才）

一、春日若宮神主祐定記拔書 一枚

右被出、簾・帽額色目可相糺事、

一、南殿御屋根葺合隅二而段を付候而、

形可保事、

雛形軒出丈尺付被出、

尤隅之處垂木包候積り之事、

但隅木ハ不及包事、

右之通被仰渡承知仕候、明日差上可申候、以上、

三月二日

「（1ウ）

一、祐定記書拔簾之形、南都職方之者

今一応可相糺旨被仰渡承知仕候、以上、

三月四日

一、紫宸殿

軒高サ式丈式尺三寸、外二壇上壺尺八寸

加へ、惣軒高地方式丈四尺壺寸二相成申候、

此軒口へ陣座・東軒廊等之棟入候哉否之事、

「（2才）

右之通被仰渡承知仕候、木子播磨江相糺、明日

可申上候、以上、

三月四日

一、縋破風是迄之紫宸殿ニ有之候哉、縋破風トハ如何之处ヲ申候哉之事、

右之通被仰渡承知仕候、相糺可申上候、

三月五日

一、紫宸殿御屋根古製御敷図忝枚・御書付共

御渡被成、右雛形差上候様被仰渡承知仕候、右雛

形来八日夕方差上可申候、

三月五日

一、春日社当時調進簾仕様、絵形ニて可差出候事、

右之趣被仰渡承知仕候、

三月五日

一、南殿簀子幅六尺之所に明三分引十四枚

板ならへ候得共、板幅何寸ニ相成候哉、以雛

形可申上事、

但六枚之板巾も書付可上事、

外ニ小絵図忝枚、

右之通被仰渡承知仕候、

三月七日

一、廻廊

宜陽殿南作合間数柱中墨方

中墨迄何尺、

日・月華門南北柱間何寸、承明門

左右同断、惣廻廊柱間同断、下侍

南柱間何尺何寸と申儀、書付可上候事、

右之通被仰渡承知仕候、猶相糺可申上候、

三月七日

└ (2ウ)

一、紫宸殿軒口ト左近陣座東軒廊棟入候哉

否之事、先達而相糺候处、差支無

之旨ニ候得共、樋之下り置土等も有之

事故、右を除候て茂差支無之哉否之事、

三月七日

右之通被仰渡承知仕候、相糺可申上候、

一、脇障子事、

一、壁留り笠木之事、

右以図可申上事、

三月七日

右之通被仰渡承知仕候、

一、紫・清兩殿図八枚、先達而日野殿被仰付

置候处、いまた忝枚も出来不申哉、忝枚ニ而も

出来次第可上候事、

一、御敷図御下ケ被遣候間、御用之節ハ

早々可上候事、

右之通被仰渡承知仕候、

三月七日

一、紫宸殿御屋根軒出、南之庭ニ東西北同様ニ

出、軒廊入候而樋掛り候哉之事、

右之通被仰渡承知仕候、

三月七日

一、春日若宮神主祐定記拔書之簾帽額色目

之事、簾師方 宮江御届申入相成筋二候ハ、

書写可申上不相成筋二候ハ、其趣可申上事、

右之通被仰渡承知仕候、猶職方江申付、跡方

可申上候、

三月七日

└ (4才)

└ (4ウ)

└ (5才)

└ (5ウ)

└ (6才)

一、妻戸図并古図四枚、一枚

此片妻戸掛金・金物等画可上事、

竹節之所中ニも竹節をたて透、両方ニ

相成候様ニ可致候、尤シホラシク工夫候而画可

上事、

一、竹台図 一枚

「(6ウ)

幅四尺ニいたし、高サ格好よろしき様ニいたし、

上之筋三筋ニ可致候事、

右之通被仰渡承知仕候、繪置物落手仕、明後日中ニ差上可申候、

三月十日

一、紫宸殿御屋根葺合ニいたし、角木簀子之角ニアテ、

四方同尺之立図 一通

一、南面計壺丈六尺ニ而、東西北丈尺短キ図 一通

「(7才)

但角木同断、簀子角方可出事、

右之通被仰渡承知仕候、

三月十日

一、松平甲斐守已下四人

此度御造営小屋場勤番之事、

右一紙、

日之御門外供溜之事、

右一紙、

内侍所江御廊下御池江掛り候之事、

伺之通御治定被仰出候事、

図一紙、

右之通被仰渡承知仕候、別紙式通

并図面一枚、則写取返上仕候、

三月十一日

「(8才)

一、紫宸殿御屋根葺合ニいたし、南面軒之出

壺丈六尺、東西北軒之出淮南面候而、同様ニ

いたし、角庇付候雛形可上事、

但南北桁階隠之上之柱ニ不続様可致事、

東西桁計ニ而、舟肘木可入事、

尤雛形大サ東西二尺計ニいたし可上事、

右之通被仰渡承知仕候、来十五日ニ差上可申候、

「(8ウ)

〔貼紙〕
「下二表、布赤、」

一、鞆屋根之儀ニ付、御画卷物、木子播磨江拝見

被仰付、則申聞、直ニ返上仕候、

一、御敷図共御見合ニ相成候間、不残差上候様

被仰渡、

但只今引掛之図者、其俣ニ致不苦旨被仰渡、

尤草図等茂有之候ハ、是も不残差上候様

被仰渡、

右之通被仰渡承知仕候、

三月十一日

〔約三分、空〕

三月十一日

「(9ウ)

一、竹台図

式枚

右 高サ四尺五寸、木地之方黄塗
切子形丸ク御手本之通引改、
尤上下・堅横框等墨塗、

右之通可引改事、

右之通被仰渡承知仕候、繪巻物落手仕候、明後

十四日差上可申候、

三月十二日

一、格天井図

壹枚

一、猿頬天井・棹縁天井・平縁天井・鏡天井

図 壹枚

「(10ウ)

一、格天井小組図 壹枚

一、格天井折上小組図 壹枚

右先達而上野掾方差出候、是二相違無之候哉、木子播磨江相糺候様被仰渡承知仕候、

三月十二日

」 (二才)

一、武家方伺候清涼殿図 三枚

右木子播磨糺之儀被仰付候間、得与

御治定之通り相考有無可申上事、

一、紫宸殿御屋根雛形御治定之趣

二而雛形之通ニいたし、桁之所隅庇之

所ニ而細ク相成候様ニいたし、明日迄ニ

可上事、

御卷物一卷被出、隅庇之所敷図ニ

いたし可上事、

□右御屋根雛形ニ四方共惣体丈

尺、将又簀子より之丈尺、得与相承り申候

様書付可上事、

右之通被仰出承知仕候、

三月十二日

」 (12才)

一、清涼殿一字御治定之御図、明十四日木子播磨江

拜見被仰付候ニ付、辰剋被出候様被仰渡承

知仕候、

三月十三日

」 (12才)

一、一昨日天井之事御尋之处、難相分ニ付、

上野掾召寄糺可有之事、

尤先達而敷図指出し候故、則拜見

被下候間、召図面天井得与相分候様ニ

書付可上候事、

右之通被仰渡承知仕候、以上、

三月十四日

」 (13才)

一、竹台笠木之上

右擬宝珠ヲ竹節ニ相改、太サ寸法之通

引分而差上候様被仰渡承知仕候、明後十六日

差上可申候、

三月十四日

」 (13才)

一、天井図（貼紙）貳枚、一右上野差上候図面ヲ以、上野へ

為引候様被仰渡承知仕候、

但鏡天井之図者、相除可申旨被仰渡、

三月十四日

長樂・右腋・永安・左腋 門図壹枚御出シ被成、廻廊割間相止メ、

最初之通、御門丈尺書改之事、

右之通被仰渡承知仕候、

三月十五日

」 (14才)

一、清涼殿御間内鴨居下方御建図

仕候様被仰渡、并壇上下端方軒口迄

丈尺付壹通被仰付候事、

右之通承知仕候、来ル廿二日差上可申候、

三月十五日

」 (14才)

竹台竹節図出来ニ付差上候处、寸尺等書付ニ

相違無御座様（貼紙）「并」竹節框ノ下之所、図面ニ

為引差上可申之旨被仰渡承知仕候、

三月十五日

一、紫宸殿御雛形并清涼殿御絵図寄割之儀、被

仰渡承知仕候、播磨相糺可申上候、以上、

三月十六日

」 (15才)

一、紫宸殿軒之出ニ付自武辺相伺候ニ付、則図面并

書面壹通被出候間、木子播磨相糺之上返答書可
出事、

右之通被仰渡落手承知仕候、木子播磨相糺日数
從跡可申上候、

一、右図面写図式枚差上候様被仰渡承知仕候、
御本紙明日返上、写図出来次第明日差上
可申候、

三月十七日

一、土佐土左守

清涼殿・小御所・常御殿御襖紺青引・

郡青引等手本絵様相認可上事、

尤金銀泥引無之絵様ハ、何ニ而も大和絵

相認可申、御手本ニ相成候間、僊末無之様

認可上事、

右之通被仰渡承知仕候、明後廿日午剋

調進可仕旨、土佐守則御請申上候、

三月十八日

一、竹台之図 式枚

大形御治定、小之形大之通ニ引改可上事、

一、腋戸之図

カケ金ナシ、二通四枚、引候而可上事、

尤書付なし、

右之通被仰渡承知仕候、来廿五日差上可申候、

三月廿日

弘廂 東面長押ヲトルベシ、

垂木桁ノ下ニ船肘木ヲ

入レテ柱ヲタツ、^{角柱}ナリ、尤アケハナシ^{ナ脱}リ、

同 南面アケハナシ、桁ヲ高く上ヘアグヘシ、

「(17才)

其寸法ハ格好ヨキ程ニスヘシ、桁ノ上モアケハナシナリ、
同 北面荒海障子ノウヘノ鳥井ナシ、上長

押ニツケテ鴨居ヲワタシ、カケザイアル
ベシ、上長押ノウヘカヘ、

但荒海障子ノコトク、朝餉間ノ布

障子・御手水間ノ布障子等ノ図モ

可改、

母屋東面五間

上長押アリ、其ウヘ壁オコシ図スベシ、

西廂 東西行長押高サ母屋ノゴトシ、

西面計ヲヒキク可造也、

一、西廂東西行ノ下長押、母屋ト同シカルベシ、

一、北廂ハ弘廂ノコトク上長押・下長押も低アルベシ、

但床高サ弘廂同断、

一、唐戸ミナニ重長押ニ造り可改、尤下ニ

半長押アルベシ、

一、石灰壇チリツホアルベシ、寸法追而可書付也、

右之通起図可改、尤草稿ニ被仰付候間、

早ク改候而可上、殿上之处も可作、尚寸法

等追而可被出事、

三月廿二日

右之通被仰渡、建図御出シ落手承知仕候、来ル

廿八日差上可申候、

三月廿二日

一、内侍所此度図引可上、是迄与此度与相分候様

引候事、

右之通被仰渡承知仕候、明日中出来、明後朝可上

新御絵図・宝永御絵図御出落手仕候、

「(19才)

「(18才)

「(18ウ)

「(11ウ)

三月廿三日

」 (19ウ)

一、武辺方相伺候起図被出、東西縋破風被止候而、

縋破風程之丈尺ニ而日隠被立候而も、何之

御差支無之可相成儀候哉、木子播磨相糺可

申上事、

三月廿六日

○前五行ノ上ニ貼紙

「武辺方相伺候紫宸起図被出、図之通

手輕キ立絵ニいたし可上、不及升形・

隅庇等之所見分ケ宜様ニいたし

可上事、

右之通被仰渡承知仕候、猶木子播磨へ

相糺、跡方可申上候、

三月廿五日

一、武辺方相伺候床高低、清涼殿御床高サを

平頭ニいたし、小御所・常御殿等何尺

程高ク相成申候哉、木子可相糺事、

三月廿六日

一、紫宸殿内室棟木迄高サ、母屋側柱之

所ニ而桁迄高サ、庇之側柱桁迄高サ何

程と申儀、木子相糺可申上事、

○貼紙
「猶相糺明後」

且元紫宸殿同所高低相糺可申上事、

三月廿六日

右三个点被仰渡承知仕候、明日播磨相糺、猶

○貼紙
「廿八日」御答可申上候、

三月廿六日

一、武辺方相伺候図一枚被出、高低元御殿と

見合、相違之處可申上事、

」 (21オ)

尤新古共書分可上事、

右之通被仰渡承知仕候、猶出来次第差上

可申候、

三月廿六日

清涼殿

一、蔀ノ処長押計ニテ鋪居ナシ、

一、母屋五間東西長押ナシ、母屋ト東廂ト

板敷ハリツゞケ也、

一、鬼間布障子・台ハン所北ノ障子・御手

水間布障子等ノ所ノ上下長押トモ、高サ

母屋ト同事、西面計長押ヒカルベシ、

一、北廂ハ母屋ヨリ板敷六寸ヒクシ、如弘廂

仍東西北等三面上下ノ長押トモヒクシ、

一、三所布障子ヘリナシニ可改、

一、蔀ノウラ、如表フチサントモ黒ヌリ、

サンノ間ハ胡フンヌリ、

右之通被仰渡承知仕候、

三月廿八日

一、清涼殿 一字

床高低板ニ而造り、自今日日取七日之内ニ

可上事、

一、竹之節図 壹枚

右被出寸法之通木形ニて造り可上事、

尤図面ニメントリト有之候得共、ナリヘニマロク

いたし可上事、

右之通被仰渡承知仕候、清涼殿板ニ而造り候

図、来月六日夕方差上可申、竹節之木形

来月三日差上可申候、

」 (23オ)

」 (21ウ)

」 (22オ)

」 (22ウ)

三月廿九日

一、(○挿入符アリ、二四丁裏ヲ参照)

一、武辺方伺有之候御殿向床高尺寸書
図写式枚被仰付内、壹枚者明朔日
差上ケ可申候、御本紙落手仕候、

三月廿九日

(○右四行ノ上ニ貼紙)

一、殿上小薙図 一枚

一、上ノ戸図 同

一、無名門図 同

一、右青瑣門図 同

一、下戸図 同

右御好之通可改事、

右之通被仰渡承知仕候、清涼殿之図差上候
節一緒ニ差上可申候、

三月廿九日

(○次ノ項、挿入符ニヨリ二丁裏ニ移サル)

一、殿上之図 壹枚

但長橋所者引ニ不及、

右御手本御出落手仕候、清涼殿建起図

差上ケ候節、返上可仕候、

三月廿九日

」 (24ウ)

一、榎本社廻廊竹之節図御出シ被成、明日迄

写取候様被仰渡承知仕候、

(○右二行ノ上ニ貼紙)

一、竹之節図 壹枚

右御渡、写取明日返上可仕并右竹節木形ニ而
出来可上旨被仰渡承知仕候、

四月朔日

一、清涼殿前御溝并石橋等之図壹枚御出、
御好之通写改可上旨承知仕候、

四月二日

一、紫宸殿御屋根并階隱御屋根等御治定之
建起図拝見被仰付承知仕候、

四月二日

一、六口惣御門并番人居所絵図 壹枚

新在家口御門

下立売口御門

同木戸門塀

町口木戸門

壹枚

右御返シ被出、落手仕候、

四月二日

一、御敷地外御造立个所

絵図面袋入 拾枚

右御返被出、落手仕候、

四月四日

」 (26才)

一、承明門石段之図 壹枚

右御書付添御出、木子播磨江申渡

可申上旨落手承知仕候、

一、紫宸殿階隱柱八寸八分之雛形可上旨

被仰渡承知仕候、

四月四日

」 (26ウ)

一、御殿向床高段違武辺方相伺候絵図

壹枚并木口図添御出、別ニ御書付之通

段違猶又相糺可申、対屋向も承糺

可申旨被仰渡、落手承知仕候、

四月五日

一、南御門

一、日之御門

」 (27才)

一、唐御門

一、対屋門

右御門屋根裏甲回祿以前者布裏甲ニ

御座候得共、木口裏甲ニ仕候得者、別而布裏

甲方者御忪様御見付等茂宜之上、御材木

木取方茂仕能御座候間、前書御門々

此度木口裏甲仕候而者如何可有御座候哉、

此段御懸合申候事、

酉四月

書面掛合之後相伺候、

右書付御渡、右裏甲之様子、播磨江相糺

可申旨承知仕候、

四月六日

一、東廂東ツラ九間、上長押五寸

ヒキク可作、

一、西廂西ツラ九間、上長押五寸

ヒキク可作、

一、殿上北ノ下長押如母屋高ク

可作、此図ノ体ヒクシ、

一、西面掖戸、西廂西ツラノ

上長押ニ准シテ可作、

一、殿上之戸

六尺一寸、

是ヲ五尺九寸ニ可改、

小部ノ高サ本図ト同事ニシテ、上ノ冠木ヲ

サグヘシ、

右之通ナレハ、是ニ准シテ、

無名・青瑣ノ門ノ冠木・長押等ヲサグベシ、

一、棹間ノ棹

板敷ヨリ上三尺許ニ

ワタスベシ、

右御書付御渡、落手承知仕候、播磨相申渡、

明日四ツ時迄差上可申候、

四月七日

一、右青瑣門等之図 壹枚

殿上上之戸之図 壹枚

右御出被成、引改差上候様被仰渡承知仕候、明日

四ツ時迄ニ差上可申候、

四月七日

一、清涼殿丈尺軒口迄之図引改之事、

右図面御渡承知仕、則引改、出来

直ニ差上ケ申候、

四月八日

一、武家方伺候天井付并元御殿御敷図等

被出候間、中井元御殿御敷図三方見合、御

有形相違所墨ニて下ケ札いたし可上事、

右之通被仰渡承知仕候、中井藤三郎方江御敷

図之儀申遣、差越次第相改差上可申候、

四月八日

一、右青瑣門・図 壹枚

一、上戸 壹枚

一、下戸 壹枚

右清書可上事、

右之通被仰渡承知仕候、出来次第差上

可申候、

四月八日

一、清涼殿 一字

紙形起図御急ニて、名無之御間、勝手拵

」 (29才)

」 (27才)

」 (28才)

」 (28才)

」 (29才)

」 (30才)

」 (30才)

」 (31才)

可上事、

右之通被仰渡承知仕候、凡日数拾五日出出来
差上可申候、依外御絵図御用被仰出候得者、
日数相延申候、

四月八日

「(31ウ)

一、武家方伺候檜皮葺・柱等个所分ニいたし
書付可上事、

右之通被仰渡、図面御渡シ、落手承知仕候、

四月八日

清涼殿之分ノ図

八枚

紫宸殿之分ノ図

六枚

下侍并宜陽殿之分ノ図

七枚

日・月華門ノ図

壹枚

敷政門・神仙門ノ図

壹枚

宣仁門・内衙門・
右青瑣門・恭礼門

壹枚

長楽・右腋・門ノ図

壹枚

永安・左腋・
和徳門ノ図

壹枚

崇明門・
一丈間之門ノ図

壹枚

南廊南ノ戸図

壹枚

承明門中扉図

壹枚

都合式拾九枚、

右図御渡シ、写被仰渡、尤御差急ニ而ハ無之旨、
落手承知仕候、

四月八日

「(33才)

一、内侍所御絵図引改可上事、

四月九日

「(33才)

一、内侍所東方雜藏二个所有来御構之中有
之候間、今度御構外江出候てハベリ悪敷差支候

事とも依有之、如掛紙図改候事、

一、巽隅井戸所改之事、

一、同東南方高堀有来之通取建之事、

一、走之外井是迄有来候間、今度同可堀事、

但有来之図西座敷之前ニ有之井、先年

此所ニ改候事、

一、五帖物置東如有来上ケマト可有事、

一、北間五ツ間西北等之方中連子之事、

一、清走今一ツ如有来取付之事、

一、中ノ間十八帖南ノ縁巾如有来五尺之事、

一、茶所南廻り縁巾如有来四尺之事、

一、八帖間乾隅縁ヒラキ之事、

一、湯殿板間之处・同所西縁北方八帖敷・

西縁北方等段可有之事、

一、湯殿敷石北入口之事、

一、板敷北四帖間・板間・湯殿等已東以各

有来段下ニ候事、

右之通被仰渡承知仕候、出来次第差上

可申候、

四月九日

「(34ウ)

一、此間方被仰付有之候絵図吟味之事、御急ニ

有之候間、木子江右之趣申付、所劳快候ハ、出勤可

上旨可申付候事、

一、仙洞御所御造立之時分被仰付候絵師、土佐

土佐守江相尋名前書付可上事、

右之通被仰渡承知仕候、木子播磨へも無油断

可申付候、土佐土佐守へも申達、差越次第差上

可申候、

「(33ウ)

「(35才)

「(34才)

四月十二日

一、清涼殿軒之出ヨリ平地迄之寸尺
書付可上事、図添、

「 (35ウ) 」

右之通被仰渡承知仕候、明日可申上候、

四月十三日

一、清涼殿内室屋根図老枚御渡、写一通被
仰付、右図面之通ニ而御保方如何ニ候哉、木子
播磨相糺、明日午剋可申上旨、被仰渡承知仕候、

四月十四日

「 (36才) 」

一、武家方伺書式通被出、

一、御台所御門内部屋々々屋根葺繕と

申ハ如何様之事、

一、棧瓦とハ如何様之事、

一、御台所向部屋々々ニ至迄御有来屋根

瓦葺有之候哉否之事、

「 (36ウ) 」

一、御地形仕様書糺之事、

右之通被仰渡、別紙二通落手仕候、猶木子江
相糺、從跡可申上候、

一、内侍所内外陣・上段等御有来と先達而

御達有之候、新図と御間疊数相違ニ付、

中井六分堺旧図之通引改可申事、

尤取合間方刀自部屋迄、准間数ニ

西江可寄事、

「 (37才) 」

右之通被仰渡、絵図御渡、落手承知仕候、
尤御急之旨是又承知仕候、

一、御殿向屋根分并柱分ケ帳御下ケニ而、

元御殿之振合朱書入可上旨被

仰渡、落手承知仕候、

一、御殿向床高段違付札差上置候処、

「 (37ウ) 」

御下ケ被成、段造り之所个所、帳面ニ而
可申上旨、絵図面并床高木口図共御渡、
落手承知仕候、猶出来次第差上可申候、

四月十五日

一、御内儀向押入并杉戸・遣戸鎖切

之場所、錠鍵付ケ候个所書付可上事、

一、非藏人部屋押入絵図被出、錠前書付可上之旨被仰渡、

一、口向錠鍵付候个所書付可上事、

「 (38才) 」

右被仰渡承知仕候、猶相糺候方可申上候、

四月十六日

一、内侍所内外陣等者、最初御指図之通ニ更ニ被

仰出、其余少々宛相違之義、絵図面可上旨、

被仰渡承知仕候、来ル廿日出来差上可申候、

四月十七日

「 (38ウ) 」

一、武辺方伺書壺通

一、右樋釣鉄物三重目飛縁垂木江取付、小

釣鉄物打、四隅之釣鉄物者、階隠屋根

垂木無之候付、裏板江上ケ打ニ仕、茅負

見付ニ小釣鉄物打候様可仕候哉、

一、紫宸殿屋根形一ツ被出、武辺方伺候掛

樋書付之趣ヲ以雛形いたし可上事、

廿日

「 (39才) 」

右之通被仰渡承知仕、来廿四日差上可申候、

四月廿日

一、御殿向御床力高御見分ケ帳面出来ニ付差上候処、

右帳面江武辺方相廻り床高相印、清涼殿卜見合候、

何程下りに与申儀書付差上候様被仰渡、御絵図

式枚・帳面沓冊御出、落手承知仕候、以上、

四月廿日

」 (39ウ)

一、八分計御絵図

沓帖

一、修理職方六分計絵図

沓帖

右御下ケ被下、来廿四日兩通共返上可

仕旨承知仕候、

四月廿日

一、武辺方相伺候清涼殿・殿上・下侍・南

廊等屋根之出、右之趣ヲ以先達而御治定建

図之通、見分やすき様ニいたし可上事、

四月廿四日

」 (40オ)

一、色分柱間御敷図并切紙写等武辺方

相伺候ニ付被出候間、御治定之御敷図見

合、相違之所掛紙ニテ相改可上事、

一、非藏人部屋戸棚絵図、武辺へ可相

達候事、

右之通被仰渡、御敷図沓紙并武辺方相

伺候図沓紙御出之分、落手承知仕候、

四月廿四日

」 (40ウ)

一、樋ノ木形幅貳寸、長サ三間計、内ヲ

円ク堀出来可上候旨、尤迫而空柱被建

候ニ付、其積リヲ以仕立可申旨、被仰渡

承知仕候、

四月廿四日

」 (41オ)

一、内侍所御敷図引改候通り御治定、今日

武辺へ御達し之事、

一、修理職部屋天井付高塀等引落之

処被改、今日御達し候事、

右之通心得ニ被仰渡承知仕候、

四月廿四日

」 (41ウ)

一、此格子先可返候事、

御好之趣迫而可被仰出候、

右格子此俣ニ而重サ何程、此うへへ金物打、

漆塗、五粉塗、惣仕上ケニ而、重サ大数

何程ニ可相成哉、衆方相考可申上事、

右御格子之義、水原摂津守方差上候由ニ而、

右之通御書付御渡、被仰渡候趣承知

仕候、摂津守へ相達申候、

四月廿七日

」 (42オ)

一、常御殿

劍璽之間御袋棚

沓枚

同 劍璽之間御床コ

沓枚

同 御清間御棚・御袋棚共

沓枚

同 御一之間御床コ・御袋棚共

沓枚

同 御寢之間御袋棚

沓枚

同 御小座敷御床コ・御違棚共

沓枚

同 劍璽之間御上段境御調台構

沓枚

右各写早々出来候而可上、若御有形ニ相違之所

有之候ハ、付札いたし可上事、

右之通被仰渡承知仕候、来月七日ニ出来

差上可申候、

四月廿八日

」 (43オ)

一、常御殿御有形床力高サ階級凡尺寸等、

一、小御所御有形床力高サ等、木子播磨相糺候様、

被仰渡承知仕候、

四月廿八日

」 (43ウ)

一、清涼殿建起之図被出改可上旨御演舌、且左之御書付御渡、

掛金之事

一、荒海障子北ノワキ戸

カケ金西ニアリ、

一、御手水間西ノワキ戸

カケ金北ニアリ、

一、鬼間西ノワキ戸

カケ金北ニアリ、

一、下戸

カケ金西ニアリ、

一、女官戸

カケ金北ニアリ、

右之通被仰渡承知仕候、建起之図改出来

次第差上可申候、

四月廿八日

一、常御殿

小御所

右両御殿簀子高サ三尺貳寸、此通御治定

被仰出候間、壹寸貳分堺ニ致し、小御所并

北西南等取付御廊下を引添可上事、

但右御廊下方小御所江之所段有之候故、

其所ニ箱段一級引添可上事、

一、元紫宸殿上御格子重サ相知候ハ、書付可上事、

一、内侍所御地面

町堀有之趣、右日限行事官行向候間、日限

相知次第行事官可申通事、

尤右之儀行事官へ申通候節可相届候事、

一、奥御廊下南水鳥間東御有来之通

遣戸被仰出候間、八分堺図面引立可上事、

尤扣図相添可上事、

四月卅日

右被仰渡承知仕候、

四月卅日

一、高低色分図

一、屋根裏図

一、木子播磨寄書 二冊

右被出候間、今一応校合候而相違無之様ニ

清書致し、明日可上事、

四月卅日

右被仰出承知仕候、

四月卅日

一、清涼殿殿上・下侍・南廊等

屋根形被出、

右御本之通御治定ニ付、同様雛形一通り

明午剋迄出来差上（貼紙ニテ修正サル）可申候、

右之通被仰渡承知仕候、

四月卅日

一、絵師名前書壺通御渡、銘々代数并

初代、且常式御用・臨時御用等、都而御用

向勤来候様子委細書付、来六日可差出旨、

土佐土佐守江可申渡段被仰渡、則申渡

御請申聞候、以上、

五月三日

一、清涼殿殿上・南廊・下侍等之屋根形御下ケ、

水取方委相分り候様屋根形仕立可上旨、依之

「(45ウ)

「(44オ)

「(45ウ)

「(46オ)

「(46ウ)

「(47オ)

「(47ウ)

先達而御治定之清涼殿紙建雛形御下ケ、
落手承知仕候、来十一日出來、差上可申候、

五月六日

」 (48才)

一、御車寄

一、参内殿御車寄

一、平唐門両妻

一、四脚御門向

右御差図ニ唐破風御座候、

一、内侍所北御廊下取合

一、紫宸殿北御廊下南取合

一、殿上西渡廊東取合

一、清涼殿北御廊下南取合

一、常御殿南御廊下北取合

一、同北御廊下南取合

右个所之分御有来之通唐破風出來候積り、

一、内侍所東取合

」 (49才)

一、清涼殿北東取合

一、同南東長橋廊東西

右内侍所東取合、御有形前縁通左右

妻戸構有之、取合御廊下ニ而壱段下り

有之、御本殿御屋根下江かゝミ有之候間、

唐破風有之候処、此度者御本殿取合

御間内ニ相成、御本殿江取付申候間、唐

破風ニ者出來不仕候、

」 (49ウ)

清涼殿北東取合、御有形者御拝御廊下・

清涼殿御縁之軒下江かゝミ有之候間、

唐破風御座候処、此度ハ拭板敷之御間ニ

相成、北庇江取付申候間、唐破風ニハ出來不仕候、

清涼殿南東長橋廊、御有形者東西ニ

唐破風御座候処、此度ハ土渡廊御屋根長橋

廊江葺下シニ相成候ニ付、唐破風出來不仕候、

一、小御所南御廊下・西御廊下共取合、右

」 (50才)

御有来唐破風無御座候ニ付、此度も無之

積相心得罷在候、

右式通御下ケ、落手承知仕候、
(○貼紙)「相糺」明日

可申上候、

五月六日

」 (50ウ)

武家ヨリ伺候格子寸法

南殿一丈五尺間

豎 七尺九寸五分

横 一丈四尺一寸四分

鼻ノ出トモハナノ出左右ニテ三寸六分也、

カマチ

左右見付 二寸四分余

同 見込 一寸八分余

上下見付 二寸五分余

同 見込 一寸八分余

」 (51才)

豎ノ子

見付 九分余

見込 八分

横ノ子

見付 一寸

見込 二分余

子ノ間

ヨコ 三寸八分余

タテ 三寸七分余

上下ノカマチ

左右ノ出各一寸八分

裏サン

見付 九分余

見込 六分余

サントサンノ間

三寸六分許

或ハ三寸六分、或ハ三寸八分、

或ハ三寸九分、

紫宸殿格子

一丈五尺間

横 壹丈三尺九寸

縦 七尺九寸五分

横サン 厚サ七分
巾一寸三分

縦子 厚一寸
巾二寸三分

板厚サ 相応何程、

金物ヒシ 四所

ツリ金 四所

右之外寸法図之通ニテ重サ何程と申儀、

木子播磨江可相尋事、

一、武家方申上候金物重サ六貫八百廿目

漆塗・胡粉塗共二百八拾目

都合重サ廿九貫八百目

木地重サ廿二貫七百目

右式紙・図壹枚仰出落手仕、明朝迄相糺候様

承知仕候、

五月七日

」 (51ウ)

一、三拾分一之割ヲ以拾丈・五丈・壹丈之

丈数紙形相調、尤壹丈之方二尺間付、

且寸間壹个所付、明朝差上候儀、被仰渡

承知仕候、

五月八日

一、瓦棟包菊壹返、割熨斗五返、肌熨

斗壹返、輪違五組、衾瓦壹返、

右御書付御出シ、明日迄二右之図差上候様、落手

承知仕候、

五月八日

一、先達而被仰出候□九枚御絵図出来

日限相糺候様被仰渡承知仕候、猶相糺御日

□□□□

五月八日

○前四行ノ上ニ貼紙

一、絵師名前御用相勤候由緒等書分ケ帳面、

土佐土佐守方差出候ニ付差上置候処、不委个所

も有之候ニ付、今一応相糺、委書付差出シ候」

様、土佐守江可申渡旨被仰渡、右帳面御出シ、

落手承知仕候、猶土佐守江可申渡候、

一、紫宸殿格子

一丈五尺間

右重サ何程ニ申儀、相糺可申上旨被仰渡

候得共、不及糺申上候旨、更被仰渡承知

仕候、

五月八日

一、紫宸殿妻戸図 七枚

右図面書改可上事、

」 (51ウ)

」 (53ウ)

」 (54才)

」 (54ウ)

五月九日

右被仰渡承知仕候、来十四日中二差上可申候、

五月九日

「(55才)

一、「清涼殿石灰」壇図 壹枚

御涼所檜垣之図 貳枚

右写老通り可上旨御出、落手承知仕候、来ル
十二日出来差上可申候、

五月十日

「(55ウ)

内侍所已下五个所

右之御場所壁之所、板壁上塗白土塗、
其外御建物御有来板壁上塗白土塗之
处、令吟味可申上事、

紫宸殿掖戸二枚可引上事、御手被出、

紫宸殿木形之割丈尺寸計紙ニテ

三枚拵上候事、

五月十日

「(56才)

右被仰渡承知仕候、明日出来差上可申候、

五月十日

御涼所図

右写可上事、

右之通被仰渡承知仕候、

五月十日

「(56ウ)

一、絵師名前書之輩身元之儀、委相糺

可申上旨、土佐土佐守江申渡候様被仰渡、

今朝差出候、右名前由緒帳御返シ、

其段申渡候处、鶴沢探索儀相加へ相談仕

申上度旨申聞、其段申上候处、御聞濟ニ而

探索江も可申渡旨被仰渡、右身元之儀、

相互ニ無遠慮糺合可申旨、是又申渡、兩人共

御請申上候、

五月十日

「(57才)

一、今朝差上候紫宸殿掖戸之図貳枚共

御治定ニ付、清書仕可上旨御渡、落手承知

仕候、明日出来差上ケ被申候、

五月十二日

「(57ウ)

一、南殿 壹丈間唐戸図 壹枚

貳丈間唐戸図 壹枚

唐戸鉄物之図 壹枚

右各両面之図ニ委書認可上事、

五月十二日

右之通被仰渡承知仕候、来十五日差上可申候、

五月十二日

「(58才)

一、南殿升形老組拵差上候様被仰出承知仕候、

来ル十六日差上可申候、

五月十三日

一、八分堺御敷図御下ケ、

常御殿北御涼所ト間夕御庭之处写図仕、

明日可上旨并御有形右御庭萩垣等之

様子別紙認可上旨、被仰渡承知仕候、以上、

五月十四日

「(58ウ)

一、下々道御有形石岩破御座候处、此度扣キ

土ニ而、石岩破之通段ヲ付候様仕度候、依

之及御懸合候事、

西五月

書面掛ケ合之趣相伺候事、

右書面之趣、御普請方ニ相伺候由、石岩破

「(59才)

之訳并扣キ土ニ而も御差支なく候筋ニ御座候哉否、相札可申上旨承知仕候、猶従跡可申上候、

- 一、窺置候唐戸之図壺枚御下ケ并東寺金剛珠院唐戸之図壺枚并同断金物之図

壺枚御渡、右両図之通ニ引改一紙并金物

之図壺枚写可上旨、尤清涼殿之唐戸之

図ニ付丸柱ニ而図面両面引立可申旨承知

仕候、明日差上ケ可申候、

- 一、清涼殿妻戸之図壺枚御渡、小壁・小柱・方立

等ヲ書加ヘ候而、右図面ニ掛紙ニテ可上旨承知仕候、

- 一、土佐土佐守江檜垣等之写絵并簾・帽額等之

写絵被仰付、絵巻物七卷御渡、来十八日調進

可仕旨、別紙清書差上申候、

- 一、清涼殿石灰壇之絵図一枚御渡、一紙引改

御書加之通書入等仕可上旨并石灰壇塵

壺之図壺枚御渡、御見分ケ能相認可上旨

承知仕候、明日差上ケ可申候、

五月十五日

- 一、塵壺之図被出、此形須浜ニ而成共、土ニ而成とも、

掬可上候、蓋つまミも無之ニ付、少シゆとりを

致し可申、壺之形、底ノ方丸ミを付可申旨

被仰渡承知仕候、来十九日差上可申候、

- 一、升形雄垂木出先御好有之、柱小口丸ミ付候様

被仰渡承知仕、来廿日差上可申候、

- 一、御普請方方伺候対屋床力段違、付札之趣を以、分り

能書付可申上之旨被仰渡、木子播磨江申渡候、

明日差上可申候、

五月十七日

「(61才)」

- 一、金物図 一枚

右清書、

- 一、紫宸殿二丈間唐戸図 裏表一枚

- 一、同一丈間唐戸図 裏表一枚

右清書、金物付合セベ之所、色付之図之通ニ

可引、尤一丈間も折妻ニ可改事、

彩色候而可上事、

五月十八日

右之通被仰渡承知仕候、日限之儀、猶跡方

可申上候、

五月十八日

- 一、八分堺御敷図 壺帖

右御下ケ、落手仕候、四分堺書入、出来次第

返上可仕旨承知仕候、以上、

五月廿日

- 一、御衝立之形チ絵図壺枚御渡、高サ幅寸尺

之分合割、惣体寸法も見計、恰好能寸書仕、

壺枚引立可上旨、落手承知仕候、明後廿三日

出来、差上可申候、

- 一、紫宸殿壺丈間・式丈間唐戸図式枚共御治定

之旨ニ而御下ケ、清書可仕旨、尤表掛金之御手

本図三枚御渡、見計清書二可付旨、落手

承知仕候、明後廿三日出来、可差上候、

- 一、塵壺形御下ケ、御治定之旨ニ付、五寸計之箱ニ

石灰壇ニ掬、右塵壺彫込、蓋山高ノ方朱ニ

塗、平ノ方胡粉塗ニ仕、右壺ノ口式尺之

大キサニ而、蓋ノユトリ寸法書付可上旨、被仰渡

承知仕候、明後廿三日可差上候、

「(62才)」

「(62才)」

「(61才)」

一、升組ノ形柱ノ上図モ竹ノ節之体ニ改可上
旨御下ケ、落手仕候、

五月廿一日

明廿五日

残有之候御築地高サ 厚サ 柱太サ

屋根瓦大小

右之通修理職行向、丈尺寸法為相糺可申事、

廿四日

右之通被仰渡承知仕候、

一、 土佐土佐守

右御簾・帽額絵相違ニ付、御遺物拝見被仰付、書改可

上旨被仰渡、則申渡、明日出来可差上旨申聞候、

一、 右同人江

清少納言記拔書拝見被仰付、右之心ヲ加へ猫ヲ画可

上旨被仰渡承知仕、則申渡候、出来日限之義も明日

可申候、

五月廿四日

一、石灰壇塵壺木形御出シ、蓋厚サ三寸五分ニ致シ、

ナソヒニ山ノ付、平ノ方壺寸五分中ニテ、ナソヒニヌキ

候而相改可上旨被仰渡承知仕候、出来日限明日

可申上候、

五月廿五日

一、清涼殿小板敷
冠木図

同 起図

右被出候間、木子可糺事、

五月廿七日

右被仰渡、落手承知仕候、明後廿九日出来可申上候、

五月廿七日

一、升組木形被出、尾垂木之先御好之通相改可上、

右御手本一紙御渡、承知落手仕候、出来日限

明日可申上候、

五月廿八日

一、簾之図 一枚 一、帽額図 一枚

一、縁図 同 一、房図 同

一、結緒図 同 一、房金物 一ツ

右被出候間、簾師江古キ簾ニ絵図之通仕立候而

可上旨可申付候事、

五月廿八日

右御書面且御演説之趣承知仕候、出来日限

之儀、猶跡方可申上候、

五月廿八日

一、御唐門外雨舎三个所、日之御門外雨舎壺个所、右屋根柿葺

之处、宝永度瓦葺之由ニ付、此度棧瓦葺致度旨、御普

請方伺出候ニ付、右之儀相糺可申上之旨被仰渡、承知

仕候、猶否追而可申上候、

五月廿八日

一、 土佐土佐守

右明朔日已剋罷出候様可申遣旨被仰渡、承知仕則

申達、御請申上候、

五月廿九日

一、 土佐土佐守

灯台之写絵被仰付絵卷物拾三卷御渡、明二日

未剋可指上、且猫之絵認替被仰付、是又明

二日可差上之旨、別紙請書差上申候、

六月朔日

一、内侍所鰻頭形被略候、為心得申渡候事、

」 (66ウ)

」 (63才)

」 (63ウ)

」 (64才)

」 (64ウ)

」 (65才)

」 (65ウ)

」 (66才)

一、明後三日御造營地縄張為見分、御用懸・議

奏衆・修理職奉行衆・御用掛・非藏人・口向・取次已下
御用懸不殘辰剋彼御地江行向ニ付、卯半剋無遲之参
集之事、

一、御涼所網代垣御好之事、有口述、

一、紫宸殿東面腋戸之図二枚、彩色候而明日已剋
可上事、

六月一日

「(67才)

右御書面之趣承知仕候、并腋戸之図御手本共四枚
落手仕候、且御涼所網代垣之図并扉之図御
演説之趣落手承知仕候、出来日限之義、猶跡方可申上候、

六月朔日

一、明三日御造營地縄張御見分御延引之旨、
被仰渡承知仕候、

六月二日

「(67才)

一、宜陽殿・軒廊・左近陣・床子座
并廂門

下侍・小庭并廂門・渡廊・

主殿司宿

右起シ図、先達而差上候清涼殿之割を以、木子江
可申付事、

六月二日

「(68才)

右之通被仰渡承知仕候、猶申渡出来日限之
儀者、跡方可申上候、

六月二日

一、唐戸図老丈間・
式丈間、 式枚

右御渡し、清書明日中ニ出来仕、明後朝可上旨、尤
書入ニ不及候旨承知仕候、

一、諸殿尺寸帳 一冊

「(68才)

右者昨日被仰渡候建起図仕立ニ付御下ケ、落手仕候、
一、元紫宸殿簀子板厚寸法修理職相糺、明日可申
上旨承知仕候、

一、内侍所東方取合唐破風出来方々伺図御下ケ、
岡嶋上野掾江申渡、御敷図ニ引合、相違無之哉可申
上旨、落手承知仕候、

六月三日

「(69才)

一、老丈間・式丈間唐戸図御下ケ、御手本図式枚之通
書入可仕旨仰出落手仕候、明日出来差上ケ申候、

六月五日

一、紫宸殿簀子板打釘之覆保方能形老ツ出来可
上旨、被仰渡承知仕候、猶申付出来次第差上可申候、

六月五日

狩野宗三

「(69才)

探川 山本数馬

右御用承始候者、何れ之代方御用承始候哉可相糺事、

右之通被仰渡承知仕、猶土佐土佐守相糺可申上候、

六月七日

一、内侍所一字之絵図老枚并
御本殿下取合之間唐破風付之図老枚共御出、右取
合之間七帖半之处、拾帖之間ニいたし、夫方惣而東江

「(70才)

間半通御建物ヲ寄セ候積り掛紙可仕、外ニ一紙新ニ
御見分能引立候様被仰渡承知仕候、来ル十一日
出来可上候、

六月八日

一、御普請方々差出候部戸重目書付御渡、右重

目ニ而上ケ下シ等差支無之哉相糺可申旨承知

仕候、猶評議仕候上可申上候、

六月八日

一、 土佐土佐守

鶴沢探索

「 (70ウ) 」

右只今召寄先達而差出候絵師名前由緒帳之内、

猶又狩野宗三・山本数馬再応御札、昨日由緒書上候、

右体之儀、最初方得と相札可申上儀、其儀無之訳、

右兩人江相札可申上旨、且又右之外二も札不行届分

有之候ハ、是又相札可申様可申渡旨、被仰渡承知

仕候、猶書付取之、明日可申上候、

「 (71才) 」

一、 御庭廻り所々井戸札之事、

武家方伺絵図四枚添、

右之通被仰渡承知仕候、猶明日可申上候、

六月九日

一、 六門近比瓦葺之事、サン瓦二候哉、丸瓦候哉、

可糺事

右之通被仰渡承知仕候、猶相札、跡方可申上候、

六月九日

一、 土佐土佐守

鶴沢探索

「 (71ウ) 」

右明十日已半剋罷出候様可申達旨、被仰渡承知

仕候、則申達候、

六月九日

一、 御涼所檜垣之図被出、檜垣曲節等恰好能

付替可入御覧旨承知仕候、猶跡方可申上候、

六月九日

一、 土佐土佐守

鶴沢探索

「 (72才) 」

右先達而差上候絵師共由緒身元札等帳面三冊御出、今一応
得と相札可上旨被仰渡、則右兩人江申渡候、

六月十日

一、 六門屋根瓦葺之儀、近来並棧瓦葺二相成候義ハ、何之

子細二而相成候哉、年月日何比二候哉、委可申上事、

右之通被仰渡承知仕候、猶相札從跡可申上候、

六月十一日

「 (72ウ) 」

一、 内侍所御本殿方取合之間之辺御手本図壹枚御出二而、

此通二清書仕、明日無間違出来可上旨、承知仕候、

六月十一日

一、 内侍所御本殿取合之間之辺御治定二付、武辺江御達之

図之通二御扣之方式通相改可上旨、被仰渡承知仕候、

一、 紫宸殿高欄高サ壹尺七寸之積り二而、木大サ割ヲ以絵図面可

上旨、被仰渡承知仕候、猶跡方出来次第可上候、

「 (73才) 」

一、 石灰壇之図壹枚御渡、扣キ土・漆喰塗両様共随分白ク

相成候様、御手本形仕立可上旨、被仰渡承知仕候、

六月十二日

一、 八分堺御絵図面御出

常御殿御間七尺間二御図相改可上并井戸も相改り候様

被仰渡承知仕候、

六月十二日

「 (73ウ) 」

一、 御普請方方伺候劍璽間御調台構図壹枚・同

御扣壹枚御出、伺図之通掛紙等仕可上旨并

常御殿江之御廊下之図壹枚御出、写壹枚出来

可上旨、被仰渡承知仕候、

六月十三日

一、 蔀戸重目之書付壹通并先達而御札二付上ケ下シ

人数等申上候書付等御出、猶又今一応右多人数不相掛、

手輕ニ可相成義木子播磨へ申付、工夫相致可申上旨被」(74才)
仰渡、御書付落手承知仕候、猶明日申付、跡方可申上候、

六月十四日

一、紫宸殿高欄高サ式尺寸御普請方々伺候絵形忝枚

御出シ、写可上之旨、被仰渡承知仕候、出来次第可差上候、

一、紫宸殿寶子板釘覆形修理職方仕立候形御治定ニテ、

御普請方江御達シニ付、写拵可差上候旨、被仰渡承知仕候、

出来次第可差上候、

六月十五日

一、紫宸殿礎之義、御絵卷物拝見仕处、難分旨ニ而、木子播磨

絵様相認伺候处、右伺之通之石形之積リニ而、木形出来可上旨、尤

從御普請方伺候御柱三品之礎木形板一枚御下ケ、落手

仕候、明後廿日ニ出来仕、差上可申候、

六月十八日

一、布障子・荒海障子図、御普請方へ御達之由ニ付忝枚宛、

尤御扣相添、先達而絹襖之図へ振合ヲ以出来可仕旨、且

起図并引手革緒之絵様も拝見被仰付、右二品共直ニ

返上仕候、且又小障子図忝枚御下ケ、清書為致可上旨、」(75才)

被仰渡承知仕候、明後廿一日出来、差上可申候、

一、紫宸殿長押之図忝枚御下ケ、写一紙可上旨承知

仕候、出来次第差上ケ可申候、

六月十九日

一、今日上候翠簾御下ケニ而、右之釣鍵四尺之御屏風之上端江

下り候積リニ而、紐ハ上卷ニ結、明日午剋迄ニ差上候様、被仰渡承

知仕候、

六月十九日

一、常御殿

御小座敷御床コ違棚之図 忝枚

右御出シ、御恰好寸法等ハ、右伺之通ニ而、御棚御好御草
案図之通引改可上旨、尤御達被成候間、写

忝通相添可上旨、

一、同御一ノ間御床御袋棚図 忝枚

右御出シ、全体寸法者、伺図之通ニ而御草案図之通

御棚恰好能見計付候図面三通計出来、金物之

所不及黄塗候旨、

右之通被仰渡、明日出来可上旨、承知仕候、

六月廿日

一、内侍所内法高サ等之義ニ付、御普請方々伺書面

写御下ケ、御恰好之義右書面之通之義ニ可有之候哉、

木子播磨江相糺可申上旨、承知仕候、

六月廿日

一、今日差上ケ候内布障子・荒海障子絵図式枚計

御下ケ、縁之義ニ付被仰渡候、外ニ御書付・御図等

二通御出、縁金物打之図忝枚出来并式枚図

書入仕可上旨、承知仕候、明日出来、差上ケ

可申候、

六月廿一日

一、今日差上候荒海障子図・布障子図

御下ケ、先御扣図之方打サイ白木之積リニ

引改可上之旨、被仰渡承知仕候、明日出来差

上ケ可申候、

六月廿二日

一、常御殿御一ノ間御床御袋棚図

右御出シ、御恰好能御金物付、明日辰剋ニ可上、尤

御写図差添可上旨ニ而、御扣之図忝枚御添

御渡被仰渡候趣承知仕候、

一、紫宸殿礎木形 御付札、

〔○本書〕
『化粧礎可為此形之通
保方之儀者為不露頭之
所之間、宜有取計、』

右御出し、御達シニ相成候、御付札通ニ而宜哉否、

返答明日辰剋被申之旨、

「(77ウ)」

一、此間上置候翠簾御出し、房三分一取除緒御印

之通短ク仕可差上之旨、

一、御涼所檜垣曲折扉等付方御好之通

相改可差上旨、

右之通被仰渡承知仕候、

六月廿二日

一、荒海障子図・布障子図

右打サイ白木御治定、引改可差上旨、

「(78ウ)」

一、右障子金物・角金物并鉾等菱形ニ改、金物恰好能寸を

付可差上、尤御扣差添可上旨、

一、此間上候礎木形今一通拵可上事、

一、小御所布障子図、御敷図見合可引上事、

右之通被仰渡承知仕候、

六月廿三日

一、 土佐土佐守

鶴沢探索

「(78ウ)」

絵師宮脇円藏以下廿八人名前書御渡、土佐守・

探索於宅兩人立会ニテ、右之絵師席面致さセ

可申候、絵様何ニ而茂彩色ニ致さセ、一両日中ニ差

上可申旨、申渡候様被仰渡、則兩人呼寄申渡、

御請申上候、

六月廿三日

一、絵巻物御出し、簾之図御絵図之通あミ方致し、

縁方縁迄之間耄ま分あミ候而可入御覧、縁帽

「(79才)」

額此間上ケ候簾之通、地色は又同様ニ而、紋者

地色同色ニ而濃ク摺可入御覧旨、被仰渡承知

仕、簾師へ申渡し、右御図面御好之處写取セ、御絵

巻物返上仕候、

「(79ウ)」

六月廿四日

御文庫引改図

小御所布障子

御涼所檜垣図

右扣一枚ツ、可上、

一、御小座鋪御床縁厚サ、木子糺之事、

且御有形可相尋事、

右之通被仰渡承知仕候、

六月廿四日

一、帽額地色形今日差上ケ候處、色薄ク候間、

惣地色并紋共全体濃ク相改可上旨御出、

落手承知仕候、

六月廿九日

〔○紙片挟込ミ〕
「一、漆喰塗至而白キ雛形御好ニ付、申付候様被

仰渡承知仕候、出来次第差上可申候、」

「(80ウ)」

六月廿九日

一、三十分一之割を以丈尺寸紙形可差上旨、

被仰渡承知仕候、

一、席面被仰付候絵師之内所勞之輩、右

席面耄人ニ而も出来候ハ、可差上候旨、被

仰渡、土佐守・探索へ申渡候處、御請申上候、

六月晦日

一、四ツ脚以上門天井張候得者、何方方張候哉、且天井

張有之御門、吹抜之處ハ板ニ而も張候哉、

「(81才)」

東寺慶賀門天井之儀、吹拔等之様子、且何方

ニ而茂天井張候門見当り有之候ハ、其趣可申上候、

四ツ脚門以上之門ニハ、腰長押者無之、右腰長押之所ニ上之柱貫同様ニ柱貫有之候事哉、右腰長押之

処江柱貫入候門、何方ニ而も御見候処有之候哉、右等之

儀、木子播磨江可相尋旨、被仰渡承知仕、則申渡候

処、猶跡方可申上候旨、申聞候、

閏六月三日

一、昨二日差上候漆喰塗仕様、委ク相認差上候様、

被仰渡承知仕候、

閏六月三日

一、承明門、日・月華門等破風口壁通虹梁上悉ク白壁ニ致、

虹梁・蛙股等仮粧ニ出シ候積り絵図面引立可上、尤木品

之分丹塗・白壁之所胡粉塗等仕分ケ、裏表ヲ両面

引ニ仕可上旨、依之木形式御下ケ、且妻飾図も御下ケ、

落手承知仕候、明後七日木形返上、絵図面来ル八日

出来差上可申候、

閏六月五日

一、清涼殿木形明日木子江拝見被仰付候間、廿五分一

之割を以丈尺寸紙計拵、卯半剋可罷出候、表江も右

同様紙計拵可上之旨、被仰渡承知仕候、

閏六月十三日

一、下侍南廊・土渡廊、先達而出来差上候屋根形分

并此度御普請方伺ニ出候同所屋根形御下ケ、

御差支否、木子播磨へ相糺、明後十七日可申上旨、落手

承知仕候、

閏六月十五日

一、来ル十九日御敷地見分ニ付、一統辰剋迄ニ此

御所江参集候様被仰渡承知仕候、

閏六月十六日

一、明後十九日御敷地御見分順書御普請方申上候、

書付一通御渡承知仕、写取直ニ返上仕候、

閏六月十七日

一、承明門、日・月花門妻方見付之図式枚被出、此通

清書致可上、且承明門之方ハ掛紙之通

引可上旨被仰渡承知仕候、出来次第可差上候、

閏六月廿日

一、今朝差上候建起図式共御下ケニ而、左之通

被仰渡、

陣座

一、床ノ高サ一尺式寸、

一、土廂南桁之下ニ柱貫一通り有ヘシ、其柱貫

高サ陣座上長押ト同シ、此処吹ヌキ、

一、土廂東一間西柱ヨリ陣座東一間西柱ニ至リ

柱貫ヲ入ルヘシ、尤陣座ノ内ニモ同通りニ柱

貫ヲ入ルヘシ、

一、板敷東ノ方長辺タリ、宣仁門ノ西壇端ノ葛

石ニ一寸計カ、ル程ニ板敷アルヘシ、

一、立部此図八尺トミユ、今一尺減シテ七尺ニ作ルヘシ、

一、土廂西吹ヌキ、桁梁ノ上下共、

宜陽殿

一、公卿座・次将ノ座・議所・大臣宿所・西ノ

土廂ノ東北并納殿・陣腋ノ南西等地覆貫

アルヘシ、又床ノ高サ一尺二寸、壁ノ下ヨセシキナ

アルヘシ、

一、妻戸何モ折戸妻折也、

「(83ウ)」

「(83ウ)」

「(84才)」

「(82ウ)」

「(82才)」

「(81ウ)」

床子座

一、腰板ナシ、腰長押ハアルヘシ、

敷政門

一、折戸ニ作妻折定木ナシ、クハンヌキアリ、

右老通、

下侍

一、北ノ方地フク貫アルヘシ、

一、妻戸二ヶ所トモ妻折戸、

一、壁ノ処ヨセ敷居アルヘシ、

一、南ノ方地フクアルヘシ、

一、床ノ高サ一尺二寸、

一、東ノカヘ上ニ柱貫、下ニ地フクアルヘシ、

殿上前立蒔

一、神仙門廊ノ軒ノ雨水モ空柱ニ落ル故、空

柱ヲ軒ニヨセテ立ル、夫方西ヘ立蒔アルヘシ、

此図者立蒔西江退キ過タルカ、可吟味事、

神仙門

一、如敷政門可作、

一、左右ノカヘ上ノ方ニ柱貫アルヘシ、

下侍西軒廊

一、西南東トモ地覆貫アルヘシ、

主殿司宿

一、東ノカヘ地フク貫并上長押アルヘシ、

右之通被仰渡承知仕候、猶直出来次第

差上可申候、

閏六月廿二日

一、来月四日本造始被仰出候旨、被仰渡承知仕候、

閏六月廿三日

一、承明門、日・月花門、其外諸門扉等之儀ニ付御書

付御渡、木子江相糺、相分リ安ク紙形等仕立、且

通例之扉絵形等認可差上之旨、被仰渡

承知仕、則木子江申渡候、尚出来次第差上可申候、

七月朔日

一、殿上之前立蒔之事

神仙門廊軒西江出ル事九尺之積ニ而、空柱

可立之、

右之通被仰渡承知仕候、

七月七日

一、東北廊辺・殿上小板敷辺起図直シ出来差上候処、

猶又御下ケ、左之通被仰渡、

一、議所南側地覆貫アルヘシ、

一、東方土廂上長押・上官侍上長押、一樣ニ可作、

陣腋上長押東北同断、

一、敷政門廊軒桁渡様、床子座南面西一間ノ

東柱ヨリ陣腋北長押ノ上ニ柱貫ヲ入テ、

此貫ヘ可渡桁、

一、床子座腰長押壁外ヘ出三寸許ト可書付、

一、敷政門関貫、

一、和徳門関貫木関貫東方ニ可有関貫、

一、陣座土廂上長押・陣座南面長押、付紙之

通ニ可作、立蒔同付長押可作之、

一、床子座・官人座等上長押高サ、次将座

上長押高サ可為同様、

一、神仙門廊軒桁、軒廊北面東一間西柱ヨリ、殿上東ヨリ第四間西ニ可渡之、

右之通被仰渡承知仕候、明後十日朝迄出来之上、差上可申候、

七月八日

「(88ウ)

一、御台所

一、対屋之下家并乗物部屋・奥部屋・湯殿・雪隠・薪部屋とも

一、御末女孀部屋并乗物部屋・湯殿・雪隠・薪部屋とも

一、御物仕部屋并乗物部屋・奥部屋・湯殿・雪隠・薪部屋とも

一、御末口番所并町人溜

一、御末口会所

一、修理職部屋并付物

一、対屋入口番所

一、対屋会所

一、御花壇物置

一、町人溜

一、御台所御門番所

一、御使番部屋

一、仕丁部屋

一、唐御門内番所

一、内玄関前供部屋腰懸ケとも

右之通此度瓦葺被仰付候事、

右之通被仰渡承知仕候、

七月八日

「(89ウ)

一、床子図三枚明後廿六日迄二出来差上候様

被仰渡承知仕候、

七月廿四日

一、御表向

一、御奥向

一、御勝手向

右御屋根・御柱等、先達而一御治定被仰出候瓦葺之外」御普請方方伺之通

御治定之旨、帳面ヲ以被仰渡承知仕候、

一、御車寄前腰掛

一、取次部屋

右式个所屋根瓦葺御治定之旨、御書付被

仰渡承知仕候、

八月三日

一、床子図

三枚

右被出、足四方共貫ヲ入可上、尤高メニ可入之、先此

図ニ右堺引立、上下寸法書付可上事、

八月十日

右之通被仰渡絵図御渡承知仕候、明後十二日出来

差上可申候、

八月十日

一、去月廿八日虫鹿三河守承り候而、日向御用掛り取次迄

尋合之義有之、難相分二付、松尾安芸・松室丹後江掛

合候事、

一、当月三日山田兵部録参り候而、松室丹後江掛合候事、

右両条共、

院中修理職奉行衆方御下知二而、非藏人江直二掛合候様

被申付候事候哉、去三日前嶋但馬江申付、修理職松宮

主水江申渡、主水より兵部録江申達候、跡方可及返答候

条、于今返答無之候間、如何候哉、今一応可相尋事、

尤此儀兼而

院中修理職奉行衆方達しも無之事故、不審二候間、

否相尋候而返答可承糺事、

右之通御書付御渡承知仕候、猶

「(90才)

「(90ウ)

「(91才)

「(91ウ)

仙洞御所夫々同役共江可申達候、

八月十二日

一、自今

仙洞御所評定衆・修理職奉行衆方被命、取次并修理職方聞合之筋此御所夫々同役二而承之、以書付取之申上候様、可相心得旨、被仰渡承知仕候、

八月十二日

一、床子図貫掛紙之通引立、明日可上旨被仰渡承知仕候、

八月十二日

一、床子図

三枚

右御出、致清書、明後日可上之旨、被仰渡承知仕候、

八月十四日

一、禁裏御台所廻御廊下

壺枚

畳敷之内板間二伺絵図

右写明日中ニ出来可上旨、御渡承知仕候、

八月十九日

一、御有形白張襖引手形可上事、

八月廿日

右之通被仰渡承知仕候、猶相糺明日可申上候、

八月廿日

一、

土佐土佐守

鶴沢探索

右今日被召絵様彩色名目之義御尋之義、被仰渡承知仕、明日書付差上可申候、

八月廿日

一、

土佐土佐守

鶴沢探索

右今日差上候絵様彩色名目書付御落手、右書付写式通宛差上さセ可申旨、且右絵様彩色名目之義、

」 (93才)

何方方尋有之候とも、今日差上候書面之通相違無之趣書付取置、其段可申上之旨、被仰渡承知仕、則兩人江申渡候、

八月廿一日

一、常御殿小御所

御襖定木金物

常御殿

御違棚間々金物

常御殿

御涼所

御棚小襖引手

右回禄已前金物御形職方之者所持有之候ハ、

可上事、若御形不有合候ハ、委彩色絵ヲ以可

申上事、

右之通被仰渡承知仕候、猶職方之衆相糺、明日可申上候、

八月廿二日

一、常御殿已下御襖向金物之義、職方相糺申上候処、

先絵形仕立、明日可差上旨被仰渡承知仕候、

職方江可申付候、

八月廿三日

一、常御殿已下御襖向御金物職方所持之分可上旨、

承知仕候、右金物此間相糺候砌方職方差急キ

損シ直シ等ニ取掛り候处在候間、取揃来卅日ニ差上候様

仕度奉存候、

八月廿四日

一、禁裏・仙洞・大女院・女院御所

御造営箇所之内、別紙絵図面之御廊下

朱引之分、御畳敷之積候得共、右之分ハ御勝手

向ニシ日々通路多可有之、左候得者、別而切損も

度々出来可致候之間、此度拭板之積り相成申間敷哉、

」 (94才)

」 (93才)

」 (94才)

末向之儀ニも有之、敢而御好等有御座間敷候間、拭板ニ相成候得者、御保も宜候ニ付、則別紙絵図面四枚相添及御相談候事、可為拭板、

右伺書之通、此御所口向大廊下拭板御治定之旨、為心得被仰渡承知仕候、

八月廿四日

一、竹之節木形 壺

右被出、同様出来可上旨被仰渡、来ル卅日午刻ニ差上可申候、

八月廿八日

一、御涼所御小襖御引手 壺

右者被返下候旨御出シ、落手仕候、其外

常御殿・渡殿等之御金物、都合数五ツ御留置之旨承知仕候、

九月朔日

一、内侍所唐戸・妻戸、其外錠ヅリ

一、紫宸殿・清涼殿、唐戸・妻戸・杉戸等个所分

一、常御殿・小御所・御涼所、其外御奥向・御表所々

唐戸・妻戸・杉戸・遣戸御錠ヅリ

一、南御門始外廻り御門々々錠ヅリ

一、承明門始御内廻り御門々々錠ヅリ

一、対屋三仲个間供御所并御勝手向錠ヅリ

右之通、清・紫両御殿者个所分計、其外都而内外御ヅリ个所御有形之振合を以書加可差上旨、被仰渡承知仕候、猶相調来廿日差上可申候、

九月七日

一、女孺預り物置引直之絵図八分堺引候を壺枚、堺無

「(95才)

之を壺枚可上之旨、被仰渡承知仕候、出来次第差上可申候、
九月十二日

一、広橋前大納言殿送

内裏御絵図、御用掛り昨日被仰出候旨、被仰渡承知仕候、

九月十四日

一、諸向御ヅリ个所分帳面差上置候处、対屋下家之分并三仲間且御勝手向等之个所分帳面之趣掛合可申旨帳面御出、被仰渡承知仕候、猶掛合之上、今一応可申上候、

九月廿一日

一、美濃紙八尺二六尺三枚継立可上旨、被仰渡承知仕候、出来次第差上可申候、

九月廿五日

一、常御殿ヨリ御黒戸迄御廊下絵図

一、御車寄東御廊下北角ヨリ申沙汰之間北迄御廊

下絵図

一、参内殿東二筋御廊下絵図

一、申口ヨリ対屋迄折廻り御廊下絵図

右絵図四枚御出シ、明日午刻迄二写出来可上旨承知仕候、

九月廿八日

一、清涼殿掖戸之図都合五枚御出シ并清涼殿起図御渡、図面引合名目書并竹節之寸法朱書等書加可上旨承知仕候、今日棟梁等播磨不伴合候ニ付、猶呼出し相糺、書付明日可申上候、

一、御物置并御候所等押入・御棚等之御書付之御用、美濃紙ニ而御絵図面式枚認可上旨、承知仕候、

「(95才)

九月廿八日

- 一、常御殿・御涼所等押入之内御棚御有形之木品万端
委敷可申上事、

右相知候ハ、以図可申上事、

十月三日

右之通御書付被渡承知仕候、猶相糺可申上候、

十月三日

- 一、押入・棚等之御入用御表・御奥向等小絵図ニ而引立可差上旨、
被仰渡承知仕候、明四日方四个日程ニハ出来差上可申候、

十月三日

「(98才)」

- 一、清涼殿掖戸之図朱書等出来差上置候处、御不審
之義ニ付図面三枚并起図御下ケ落手仕、猶
相改明日差上可申候、

十月三日

- 一、土佐土佐守已下絵師七拾人明五日午剋御用之

義ニ付召寄候様、依之被仰渡候趣承知仕候、則向々
申達候、

十月四日

- 一、御殿向御絵様帳一冊并絵師共江申渡候、御絵様

書付六拾五通御渡落手仕、則今日申渡、一統請書

取之、明日差出可申候、尤御絵様帳面ハ写取

次第返上可仕候、

十月五日

「(98ウ)」

- 一、勘使部屋并束指出・玄関・物置・湯殿・雪隠取合共

- 一、取次詰所并医師候所西南取合廊下・茶所・日記部屋・

押入・湯殿・雪隠共

- 一、炭部屋・山科物置并雪隠其外取合共

- 一、御賄部屋・御膳番部屋・板本部屋・吟味部屋・行事部屋・

木具部屋并取合雪隠共

右者御台所大屋根続き見渡末々之个所ニ御座候間、

此度瓦屋ね之積ニ可仕候、先達而御台所計瓦屋ね伺「(99才)」

相済申候处、右大屋根軒下ニ相成候部屋ニ茂有之候間、書

面之个所にて瓦屋ね積リニ可仕奉存候、依之此段為

念御掛合候事、

十月

右御普請方方伺候趣御治定ニ付、為心得被仰渡承知仕候、

十月六日

- 一、清涼殿殿上・渡廊御柱石絵図

禁裏御殿向所々御引手形

右明十五日午剋迄ニ写差上可申旨、被仰渡

承知仕候、

十月十四日

「(99ウ)」

- 一、今日差上候押入・御棚等之御用小絵図八枚共

御下ケ分ニ書落箇所御書付御渡、猶得と相改

差上可申旨、被仰渡落手承知仕候、来ル十八日出

来、改差上可申候、

十月十四日

- 一、棟瓦獅々口之図御下ケ、写出来可差上旨承知仕、

出来次第明日差上可申候、

十月十五日

- 一、禁裏御殿向御屋ね所々獅子口棟瓦三ツ、頭・足元とも

御改、表菊ニ付候様申付候处、足元与鰭瓦之分ハ往古より「(100才)」

造り花ニ仕立来候旨、瓦師触頭申聞候間、相違茂有

之間敷候得共、別紙絵図之通可然候哉、為念

御懸ケ合申候事

十月

右御普請方々伺書面之趣相糺可申上旨承知仕候、
猶明日可申上候、

十月十五日

一、唐御門番所絵図

右写差上可申旨、被仰渡承知仕候、明日差上可申候、

十月十六日

」 (100ウ)

一、議奏候所・近習小番所縁側隔辺八分堺

絵図引立可上旨、被仰渡承知仕候、出来次第

差上可申候、

十月十七日

一、御門之扉之図五枚御出し、写明日已剋迄ニ出来

可申上旨、被仰渡承知仕候、出来次第差上度

奉存候、

十月十九日

」 (101才)

清涼殿

舞御覧之節、畳計敷候ハ、畳何帖御入用

可有之哉、

紫宸殿

御花見之時、畳何帖御入用可有之哉、

万燈御覧之時、紫宸殿御畳用候、其数

何帖御入用候哉、

小御所

廂畳被敷候ハ、何帖御入用候哉、

右相糺書付可上旨、尤小御所廂御畳之儀者、

四方書分ケ可上旨、被仰渡承知仕候、

十月十九日

」 (101ウ)

一、今朝差上候議奏候所・近習小番所縁側

隔辺絵図面御下ケ、右隔両面舞良戸西開キ

付札仕可上旨、尤御扣差添可申旨承知仕候、

十月十九日

一、御造営御絵御用被仰付候絵師共已来伝

奏衆江御届願書等差出候義有之候節者、

最初願書御奉行方へも差出、両願之義ニ付、

同様ニ可差出筋ニ付、心得違無之様、土佐土佐守へ

可申渡旨被仰渡、則土佐守并鶴沢探索江

申渡候、

十月廿三日

」 (102才)

一、先達而出来差上候宜陽殿已下起図出来

可差上旨、被仰渡承知仕候、

十月廿四日

一、常御殿御元形御小座敷御床御違棚之図、

木子播磨方覺悟之絵図明日可上旨、被仰渡

承知仕候、

十月廿四日

」 (102ウ)

一、土佐土佐守

明日罷出候義、則申渡候、

十月廿四日

一、明廿六日疊師・両職・木子播磨等已剋

可罷出事、

十月廿五日

右之通被仰渡承知仕候、

十月廿五日

」 (103才)

一、土佐土佐守

右弟子恒枝専蔵故障ニ付、御絵御用之義猶又

願書差出由ニ而、願之通御聞濟之段、今日被仰渡候事、

十月廿五日

一、清涼殿殿上・台盤所辺御疊敷方絵図式枚、外二
同御疊敷入之絵図壹枚御出シ、右御疊尺寸何程と
申儀、職方者江相糺、付札致させ可差上之旨、被
仰渡承知仕候、

十月廿六日

「 (103才) 」

一、御元形御疊二重縁内ク、ミ縁両様二分テ
職方相糺書付可上旨、被仰渡承知仕候、猶明日
可申上候、

十月廿六日

一、内衙門小柱内法板敷方鴨居迄内法寸法等、
木子相糺可申上旨、被仰渡承知仕候、猶相糺明日
可申上候、

十月廿六日

一、御有形中敷居之寸法可上旨、則一紙差上候処、
右中敷立所之間高サ寸法等相違無之哉、相糺絵図
引立可上旨、被仰渡承知仕候、猶明日可申上候、

十月廿六日

「 (104才) 」

一、舞御覽・能御覽・御花見・万燈等之節、紫宸殿・
清涼殿御元形御疊、雲縹何程、高麗何程疊枚
書付明日差出候様、職方之者へ可申渡之旨被仰
渡承知仕、則職方之者江申渡候、明日差上可申候、

十月廿七日

一、陣座寄障子之図壹枚御出シ、一紙引立可上、
尤妻入二不及之旨、明日可上旨、落手承知仕候、

十一月四日

「 (104才) 」

一、舞御覽・御花見・御修法等之節、紫宸殿・清涼殿
被構候図、修理職有之候、右取揃可差上候、右御構
之節、疊被敷候、買物使方相糺、員数書付、右之

図二相添可差上旨、被命渡承知仕候、

十一月五日

一、四分堺二枚御出シ、紫宸殿・清涼殿御張紙之分、御疊
数積り可申上旨承知仕候、

十一月六日

「 (105才) 」

一、土佐土佐守
先達而被仰付候紺青引・郡青引等之絵手本、
今一紙ツ、可上事、

十一月十日

右之通被仰渡承知仕候、則土佐守へ申達候、尤御急
二付、明日中出来、明後十二日已刻可差上旨、是又
申達候、御請申上候事、

十一月十日

一、禁裏申口南取合間、女孺預り物置之図壹枚、
右御普請方方伺之趣、向々差支無之哉、相糺
可申上旨、絵面御渡、承知仕候、

十一月十日

「 (105才) 」

一、連子図 三枚

一、女孺預り物置図 壹枚

右図御渡、写壹通ツ、可上旨、落手承知仕、昨日
出来差上可申候、

一、豊岡中務大輔殿産穢二付、御用掛り被

免候段、被仰渡承知仕候、

十一月十二日

「 (106才) 」

一、押入・御棚等之付札付小絵図 十枚

右御出シ、御達相成候間、一通り清書出来可上旨
承知落手仕候、来十八日比出来、差上可申候、

十一月十三日

一、対屋之井戸沓个所御不審并縁付増方絵図

可上旨并小御所前拾八間廊下外縁之処、建具之義相糺可申上旨、猶相糺跡方可申上候、

十一月十三日

一、御涼所御違棚之図 沓枚

」 (106才)

御小座敷御違棚之図 沓枚

右式枚御下ケ、御金物之義二付、木子相糺絵図引立、

明後日可上旨、被仰渡落手承知仕候、

十一月廿日

一、御涼所御違棚

一、御小座敷御違棚

右御金物御有形赤銅銀二筋等入候御金物有之候哉、

其外二も右体之御金物等有之候哉、飭方相調委細可申

上之旨、被仰渡承知仕候、猶職方者相糺、明日可申上候、

十一月廿三日

」 (107才)

一、内侍所御肌衣掛并御灯籠釣所之絵図 沓枚

右図御渡、写明日可上旨、落手承知仕候、

十一月廿五日

一、去十八日高丘三位殿御用掛被免候旨、豊岡

中務大輔殿如元御用掛り被仰出候旨、為心得

被仰渡承知仕候、

十一月廿六日

一、土佐土佐守

鶴沢探索

右明廿七日巳半剋、

木子播磨

」 (107才)

右同日巳剋、

右之通罷出候様可相達旨、被仰渡承知仕候、

十一月廿六日

一、内侍所上段取合之間・拾帖之間・中之間・

拾五帖之間・拾三帖

一、御同所南座敷三間

一、小御所 一、常御殿 一、御涼所

一、参内殿 一、御黒戸 一、御湯殿

一、御輿寄奏者所 一、虎之間 一、鶴之間 』 (108才)

一、桜之間 一、麝香之間 一、水鳥之間

一、八景之間 一、林和靖之間 一、錦鶏之間

一、議奏候所 一、落長押之間 一、近習番衆所

一、御厨子所上段 一、御膳所上段 一、申之口拭板間内

一、女孺詰所 一、同取合之間 一、男居式夕間

一、申沙汰之間 一、御献之間并御用場共

一、伝奏部屋 一、長橋局上之間・二之間・三之間

一、対屋上段化粧之間・次之間 一、同所脇局上之間 』 (108才)

一、内々小番衆所 一、外様御番衆所 一、色紙部屋

一、御差部屋八帖式夕間・物置共

此外臨時御用御畳

右二重縁之分、

内侍所

一、玄関并刀自部屋其外勝手向不残

一、惣御東司

一、近習・内々・外様納戸 一、八景間前縁座敷

一、御詰非藏人候所 一、同休所 』 (109才)

一、奥・表等御物置不残 一、御廊下向不残

一、膳部所已下口向 一、梳之間二間

一、長橋局七帖半・四帖間已下口向

一、対屋脇局八帖間 一、同重局三間物置已下勝手向

一、西対屋西端六帖間 一、端非蔵人部屋三間・同取合間・

三帖二夕間・同非蔵人口北方一間

一、奥・表畳敷廁之分

右押含縁之分、

右御書付式通御渡、書面之通ニ而御煤其外諸事ニ 」（109ウ）

御指支之筋無之哉、買物使并疊方等迄も相糺

可申上旨承知仕候、

十一月廿八日

一、起図被出、主殿司宿部表マイラニ相改可上旨、
落手承知仕候、

十一月廿九日

一、去廿五日御違棚御有形金物壱、職方方取寄差上候処、

去廿七日被返下、落手仕候、書落候ニ付今日御請申上候、

十二月二日 」（110オ）

一、御普請方伺候御簾掛ケ箇所之絵図拾五枚

御出シ、修理職六分堺図面江写取候様承知仕候、

十二月六日

一、八分之割ヲ以、御涼所・外様小番衆所、

右可引上事、

右之通被仰渡承知仕候、明後十日ニ出来可差上候、

十二月九日

一、御元形御三間辺之御廊下板ハメ直改、修理職

部屋之縁并御文庫之引直シ場所等、修理職六分堺 」（110ウ）

相改置可申旨、被仰渡承知仕候、

十二月十一日

一、 大岡金吾

建礼門ヨリ御着座

駒牽之御下絵

右御下ケ、御治定ニ候間、一統之□御下絵相伺可申旨、尤

右下絵ニ御付札之分も御下絵ニ書加、御門并人物等

割合宜相認可差出旨、猶土佐・鶴沢明朝呼寄

可申渡候、

十二月十六日 」（111オ）

小御所御襖

上段東南北、各柱間三間、但一間ニ二枚宛、

南三間之所四枚、但柱ナシ、

合二十二枚 鶴沢探索

小御所御襖

庇南面 四枚

三間之所四枚、但柱ナシ、 狩野宗三 」（111ウ）

右御書付式通御渡、全体之御襖寸法之義者、

武家ニ而沙汰も可有之候得共、格別之御絵様ニ付、

斎之亮・金吾同様ニ草案下絵相認相伺

可申旨可申渡段、被仰渡承知仕候、猶明朝可

申渡候、

十二月十七日

一、内衙門寄障子図壱枚并御添書 壱通

右御出、右図を以木子播磨江木形申付可上旨、被

仰渡承知仕候、右図并御添書共写取、即日返上仕候、

十二月廿日 」（112オ）

一、御筵道之形チ致出来候哉之旨、被仰渡承知仕候、則

疊方江申渡、明後廿八日差上被申候、

十二月廿六日 」（112ウ）

「慶応元年從十一月良隅御取広御用帳」翻刻

〔凡例〕

一、本稿は「慶応元年從十一月良隅御取広御用帳」（宮内庁書陵部図書寮文庫所蔵『造内裏並遷幸一会』、函架番号五一五―一、全二一点のうち）を翻刻するものである。

- 一、翻刻は通行の方針に倣う。
- 一、改行は底本のままとする。
- 一、文字は通行の字体に改め、読点および並列点を加える。
- 一、改丁の箇所には「」を付し、丁数を示す。

〔翻刻〕

（表紙）

「慶応元年從十一月
良隅御取広御用帳」

（本文）

慶応元年十一月十九日

一、今般良隅御地面御取広并花御殿御模様替等御普請

御用掛当奉行三人へ被

仰下候旨、三條大納言被申渡、今日

内侍所本殿御修覆出来引渡ニ付奉行参合也、三人共謹奉
御請申上候事、

一、今度御用掛当奉行之外ハ無之趣ニ候間、武伝江前条奉候
旨相届、追々之御用者從何レ沙汰有之候事哉、又窺事ハ議奏
候哉、武伝方ニ候哉承繕之處、惣而武伝掛リ之旨被示、先当節是与
申御用ハ無之、追々ニ沙汰可被為旨ニ候事、

廿日

「（1才）

一、
修理職

中川宮内

広瀬左衛門

下川辺主税

下役 惣一郎

平三

右今度御用掛奉候旨吹聴、御札万事宜頼度等、以手札
奉行三人亭へ届来候事、
右修理職へ御用掛申渡ハ不有奉行、
依武伝被申渡候事

卅日

一、来月三日已刻木造始被仰出候旨、為心得武伝卿輩奉
行可参哉尋之處、誠形而已之儀ニ候間、奉行不及参仕旨被
答候事、

「（1ウ）

十二月二日

一、准后東之方御築地瓦取払ニ付、目隠之仕様、以絵図職伺出、
付于武伝伺之通相濟、職へ下知候事、

一、飛鳥井中納言被示、今度御用是迄武家往反之義、彼是有之、
可被申候筈ニ候へとも数々之義候、依之帳面一冊御渡、可一筆被示暫借用、
一筆写取返却候事、写在別冊、

一、来ル五日已刻王相祭・土王祭御治定付而者仮家入用、右
取建候旨、宮内届出候事、

右者奉行心得迄ニ申出儀之、何方へも不及届奉行
承知之事、

「（2才）

一、今度御用、從初発悉皆相濟候迄、先比
内侍所御修覆中、以例修理職加扶持拝領仕度願書差出、
余り早過候間、奉行方ニ預置、猶宜比勘へ可勘考遣旨、申
答候事、右願書差出節之ころへ写之、

三日

一、木造始無異相濟候旨、為理依參合宮内届出承知、不及恐悅申上、又何方へ届二も不及候事、

七日

一、武伝被為見写取返却、

良隅御築地御取広御普請之儀、御場所柄御

手薄二茂有之、新規御築地出来迄、在来御築地其俣

差置候之様、御両卿方御沙汰之趣二相心得、手組取計

居候得共、何分御所築地皆新二而者、御成功緩急二拘り候之

訳を以、在来者之内御遣廻シ打合之处、屋根廻り御遣廻ハ

相濟候趣相答候付、御修築果敢取茂宜聊安慮仕候旨、

然ル处猶御場所取扱之面々、実地経檢速成手順取調

候得者、有栖川宮在来練堀者、今度御取広御築地

修築二付、即日不残不取払共不差支候間、別紙絵図

朱引之通、朔平御門横手右宮構取付迄并猿ヶ辻同断

取付迄之处、新規御築地築足、其余者右宮構練堀

并御門等扉関貫ベリ丈夫二付置、外側竹矢来・板囲・

在来御築地、内側板囲共取計候者、都合三重之御

締二相成、敢而御用害二拘り候程之儀無之哉二付、

絵図出来之分者、在来御築地取壊引建二者相

成間敷哉、再応之訳二ハ候へとも、第一御築地御成功遅速二

寄、花御殿御引移期節二茂相係り、将当節御国事

多端莫大入費有之折柄二候得共、前頭差略二依、夥敷

人力冗費を省、万端簡便二相成候儀、何卒御用掛リ之

御方々二而茂、御恕察御勘弁相成候様、訳而御談可申上旨、

滝川讃岐守申聞候二付、厚勘弁仕候处、素々在来御築地

其俣差置、新御築出来候様与之御儀者、御場所柄御守衛

御手薄故之儀与相心得候二付、前書讃岐守申聞候通、三重

之御囲二罷成、聊不締之儀無之候二付、何卒右二而御宥被

下間敷哉、尤新築在来御築地取合之处、不目立様御出来
形心を用御成功可被計旨、讃岐守へ相達可申与奉存候二付、
此段相伺候事、

十二月

右写取如此、但右二囲方之絵図有之、今度限不用之儀二候へハ図ハ不写

留、同返却候事、

八日

見かへし

松平若狭守

松平越中守与力

田中円三郎

大嶋安太郎

右同人同心

大野保右衛門

中川亀之助

土橋寅次郎

中川寅五郎

右此度

禁裏御所御取広御普請場退却、見廻り申付候旨、越中

守方申越候二付、此段申上候事、

十二日

一、武伝被為見、

見かへし

松平若狭守

御築地御普請中、仮土堀取建之儀、打合

相濟候付、内外竹矢来・板囲、取補理候積、然ル处、

外囲之内、有栖川宮御構東側折廻り土堀之

儀者、差向不取払共於右宮御差支無之候ハ、

「(4才)」

「(3才)」

「(4ウ)」

「(3ウ)」

別紙絵図面朱引之分者、矢来之代り右土

「(5才)

堀を相用候方、御締茂慥ニ可有之与奉存候間、

右ニ而御差支茂無之候ハ、右土堀取払之儀、御築地

出来迄御見合相成候様仕度旨、瀧川讃岐守申

聞候付、右ニ而思召茂無御座候ハ、其趣有栖川宮へ

御達置被下度、別紙絵図面掛御目、此段相伺

候之事、

十二月

右二冊方絵図面忝枚差添、武伝被為見、各為心得宮内へ申聞、
但絵図面誠当分仮向様之事ニ候へハ、別段不写候事、

一、見かへし

松平若狭守

松平若狭守組与力

水野四郎右衛門

遠山隠岐守組与力

佐久間啓次朗

若狭守組同心

鈴木安太郎

隠岐守組同心

山崎善吾

右

禁裏御築地艮隅御取広并花御殿御模様

替御普請御場所、当分昼夜見廻り申付置

候処、此度右御場所昼夜見廻り申渡候付、此段

申上候事、

十二月

一、見かへし

松平若狭守

小堀数馬倅

小堀右膳

右

禁裏御築地艮隅御取広其外仕越取

掛二付、御普請小屋場等江茂右膳召連罷出

候様仕度旨、松平越中守江申聞候処、申

出候通相心得可申旨、相達候段、瀧川讃岐

守申聞候付、此段申上置候事、

十二月

已上三通、写取武伝へ令返却候事、

十五日

一、御取広之御地面、新規築建御築地形縄張出来二付、明後十七日

已刻為見分武伝両卿被向候間、当奉行も申合、忝人可見分、職へも可

下知、但飛鳥井家へ可参集等、野宮黄門被示、宮内へ令下知候事、

十七日

一、御築地縄張見分奉行一人申合可参向之处、各参向治定、而庭田

殿不参、集会于飛鳥井家、武伝同伴向御場所、掛面々出頭、
中井保次郎誘引、所々見分、小時相濟、衣体衣冠・狩衣可為勝
手、過日伝奏被示、今日各衣冠・直衣等也、

「(7才)

廿日

一、大將軍并金神等除方忌祭被仰出、今日相濟旨職広瀬

届出候事、

廿七日

見かへし

松平若狭守

禁裏御築地艮隅御取広付功被仰付候

之処、更ニ御用掛被仰付候者名前

松平越中守与力
竹内盛之進

瀧川讃岐守組与力

野村鉄三郎

長井筑前守元組与力

平塚表次郎

松平若狭守組与力

梶川文吾

御普請役

荒堀豊太郎

越中守同心

太田岩之助

平川鉄蔵

筑前守元組同心

吉竹徳蔵

若狭守組同心

鈴木幸太郎

遠山隠岐守組同心

中村広吉

小堀数馬元ノ手代

林田式之助

同人手代

浅田次三郎

中村麦右衛門

西村吉次郎

中井保三郎支配
御扶持人棟梁

池上幸太郎

頭棟梁

岡嶋日向掾

平棟梁

┌
(7ウ)

今村加賀掾

大東相模掾

長谷川從之助

堀内糸太郎

外ニ讃岐守組同心見習
御用会所書物助

松平又市

右之通御座候事、

十二月

右一紙、

見かへし

松平若狭守

瀧川讃岐守

小堀数馬

禁裏御築地良隅御取広、先ツ御用取扱被

仰付候処、更ニ御用掛被仰付、

松平若狭守

右同断ニ付、更ニ御用取扱被仰付、

中井保三郎

御入用取調役

渡辺啓之助

右前同断ニ付、更ニ御用掛被仰付、

右之通、松平越中守相達候事、

十二月

右一紙、

已上二紙、野宮中納言被為見、写取返却候事、

一、凝花洞御厩御覽所良隅御広ケ之御場所へ被引候旨、為心得

野宮中納言被示、修理職へ令下知候事、

┌
(8ウ)

┌
(9才)

(慶応)
同二年正月十五日

一、 見かへし

遠山隠岐守

坂本柳左衛門当地諸入用立会御用

として致上京候、右者

御所之御賄向惣御入用立会之儀者

出役不致積、尤御入用筋之儀二付而者、

自然引合候儀茂可有之、且御普請

御修復之儀茂、時宜ニ寄場所見置

不申候而者、不都合之儀茂有之候節者、

無出役と申談候儀茂可有之候間、

得其意其筋々江可被達置候、

右之通松平越中守申聞候二付、此段申

上置候事、

正月

右一紙、為心得飛鳥井被見、写取返却了、

十九日

一、 艮隅御築地、明廿日方取壊伺済之旨、

付武家方申越候間、御庭御境堺板囲

一重ニ相成候二付而者、同夜方私共御遣水御庭

一円并板囲非常口方御場所等夜廻可仕

哉、此段奉伺候、

正月十九日 修理職

但シ

内侍所御修復中御同様加勢之者

夜廻り為仕候積ニ御座候、

右宮内差出、付于議奏新大納言之処、伺之通可為夜廻旨被

申渡、即及下知候事、

廿日

一、 昨日窺済夜廻之事、刻限伺出、即其由広橋大納言へ申入候処、

御内儀被伺戌刻ニ一反、子刻ニ一反、可令夜廻被申渡、宮内及下

知候事、

廿八日

一、 乍恐奉願上口上

一、 艮隅御築地御取壊二付、先日方連夜々廻被

仰付、則相勤罷在候処、当時御勘定向種々

手込候仕立方ニ相成御座候処、此頃別而

御錦台御建替并聴雪御屋根御葺替

并其外所々御修復ニ而御用繁二付、加勢之

者江も助ケ為致居候次第御座候処、連夜

兩度夜廻り仕候而者、彼是御用繁奔走、

身体難相続哉与心配仕候間、何卒一个度

者御使番ニ而相廻候様、被仰付被下候ハ、難有

仕合奉存候、此段伏而奉願上候、以上、

正月

右職宮内差出候二付、付于二位宰相中将置候事、

廿九日

一、 昨日職願出夜廻之儀、不無理筋相聞候間、願之通戌刻職夜廻、子刻

鳥飼之旨被申渡、即職下河辺へ申渡候、鳥飼者議奏ヨリ可有

下知、同卿被噂候事、

二月二日

御築地御普請者重モニ土仕事故埃り立、且是迄

御普請之節春之内方笠相用候趣之書留茂相

見候二付、諸職人・人足等笠御免御用掛之もの等

御普請場并小屋場内とも笠相用候様仕度旨、

「(一〇才)

「(一二ウ)

「(9ウ)

「(二才)

「(一〇ウ)

瀧川讃岐守申聞候付、此段相伺候事、

二月

見かへし

松平若狭守

「(12才)

別紙野宮中納言被渡候、写取令返却候事、

三月五日

一、花御殿御模様替御治定、図一紙野宮中納言被相渡之間、写一枚

職^{宮内}主税・等へ令下知候事、

八日

一、過日申付置候図写出来二付、職宮内差出、元紙令返却于野宮黃門候事、

四月廿二日

一、修理職加扶持拝領願有之、願書昨冬差出候处、少々都合之義

有之、奉行方ニ仰留置、今日武伝へ差出候处、落手之事、

願書写願書帳ニ有之、

「(12ウ)

廿六日

一、昨日武伝依示参集之处、此度東宮御殿御新造二付、建絵図

可一覽、猶又修理職江も委細可申渡被奉候、其旨職三人江下知候、

別紙両通被為見写取、令返却候事、

一、東宮御殿

一、拾帖御間

御床コ張付

御違棚廻り張付

御袋棚御地袋御小襖^{押紙、御小襖大縁裂地模様、追而手本裂ヲ以相伺候積り、}

西側南側御襖

「(13才)

右御絵、砂子中彩色之積、

一、東八帖御間

北側西側御襖 押紙、泥引、

右御絵、薄彩色之積り、

一、東拾式帖御間

東側南側西側御襖并張付

押紙、右御絵砂子中彩色、

一、西拾式帖御間

東側南側御襖并張付

一、中八帖御間

東側北側西側御襖

「(13ウ)

一、西八帖御間

北側東御襖

右御絵、墨絵付立之積、^{押紙ニ、泥引薄彩色、}

一、北御縁座敷西仕切杉戸

一、南御縁座敷中仕切杉戸

一、西御縁座敷北側仕切杉戸

右御絵、中彩色之積、

一、御縁座敷内仕切遣戸裏張付

右鳥之子紙白張之積、^{押紙、何れも御襖同様絵、}

「(14才)

一、御次拾式帖・六帖、拾帖、八帖三^三、二帖共御間

仕切ニ御襖

右鳥之子紙白張之積、

右老紙、

見返シ

松平若狭守

東宮御殿御新造被仰出候付、御間取其外仕様等、過日

絵図面を以相伺候处、御兩卿方御答之趣、朱書掛紙三个所之内、

二筋御廊下床上ケ・女中廊下取建之儀者、絵図面ニ而者巨細

相分り兼可申候之間、建起図取組、猶又相伺候旨、且右御殿

御構二越堀之儀者、外並之通、枅材相用可申儀ニ候得共、

「(14ウ)

枅材払底之儀者、過日伺済之通之次第二付、檜・榎材取交取

建之積、且亦御殿向始御張付・御襖等、花御殿ニ働取調、別紙
絵図面ニ相印付、書付相添差越、尤御絵様并御絵師人体義
者、從

御所表御取極申上被仰出候積、相心得申候旨、夫々為手繰打
合候段、瀧川讃岐守申聞候ニ付、別紙絵図壹枚・書付壹通并
建起図等相添、此段相伺候事、

四月

五月廿四日

一、花御殿御模様替ニ付、准后江出御通廊下茂少々御模様被為替候」(15才)

ニ付、其間仮廊下出来也、御代銀ハ從御普請方出、仮廊下ハ修理職ニ而出来也、右取掛ニ付而ハ今度花御

殿北へ御新建素屋根高サ八間、付而ハ仮廊下取掛中、御内儀へ

目隠七間^{高サ}也、是ニ而茂末前条素屋根掛、從足場ハ見越候得共、

元來仮廊下之處、六ヶ敷御場所ニ而、目隠之工合甚不宜、從七間高クハ

難出来如何可仕哉、職伺出伝奏へ示談候處、無是非儀、御内儀へハ

其由篤与可被申上置之間、七間之目隠取立ニ而可宜被示、其旨及

下知候、且囲方図一枚有之、武伝へ差出置候事、

六月廿八日

一、艮隅御普請ニ付高見隠取建、別紙絵図面

之通、来ル朔方取掛り、日数十五个日ニ而出来仕」(15ウ)

度旨、右御用掛り申出候ニ付奉伺候、

寅六月

修理職

廿九日

艮隅御普請ニ付高見隠伺書一日方取掛之義、御内儀ニ

御差支有之、追而御沙汰可有之旨、三條前垂相被申渡候、

則職加勢中山申渡候事、

七月十八日

過日武伝江差出候御普請高目隠囲方、花御殿方余り近く

相成、御目障り相成候間、相成候丈北江相寄可取建、図面更ニ

引改、以議卿可伺野宮中納言被申渡、則主税江示命候事、」(16才)

廿三日

一、過日伺相成有之候艮隅御普請高見隠、図面之通被仰出、且

何日より取掛候哉御尋ニ付、即職宮内へ下知、取掛日限相尋候處、御指

支不被為在者、從明日ニ而も取掛り度、尤四・五日中午出来之旨、其旨加勢

右京大夫へ申入相伺候處、從明日可取掛被仰出候旨、前同卿被申

渡宮内令下知候事、

廿六日

一、来月五日辰刻 木造始 但略式於小屋場、

同十一日巳刻 除方吉祭

同十四日辰刻 礎

同廿四日辰刻 立柱 (○付紙)「同斷」

同廿七日巳刻 上棟

右御治定之旨、武伝飛鳥井中納言被申渡候、則一紙ニ認宮内へ

令下知候事、

八月二日

一、御普請ニ付木造始已下被仰出候内、地曳之義、不被為在茂如何ニ付、更

幸徳井へ勘文被仰付、

来ル五日辰刻 地曳

右之通御治定之旨、武伝被申渡、木造始式畢、引続地曳之旨、同

被示候、職加勢坪田へ及下知候事、」(17才)

四日

一、明五日本造始ニ付、御造営掛御祝酒、先例之通給候哉、職宮内伺出候

間、飛鳥井中納言江及訊問候處、可賜之旨被答、職申渡候事、

一、明五日本造始ニ付、図式枚・式一通・役付一通、職宮内差出落手了、

但何レ茂不請、奉行抑留

一、明五日本造始ニ付、御祝酒可賜之間、可參集飛鳥井中納言被申

渡候事、

五日

一、東宮御殿木造始、無滯被為濟候旨職届出、恐悅申上、奉行参集、而庭田殿不参、冷泉殿通善等恐悅言上、非藏人表使如例了、
「(11ウ)」

一、同上二付御祝酒拝領、赤飯・重台・肴等也、不及御礼之沙汰、但恐悅言上、先例不分明、依之指貫着用之事、

七日

一、東宮御殿木造始、過日被濟候二付、御祝儀奉行一同へ賜之候旨、広橋大納言於役所被申渡、即御目六被渡、

金貳百匹

右畏拝受、奉行第一為理方御相奉行へハ御伝可申、同卿被示、則御伝申畢、
御伝申様ハ、例春秋如御祝義節仕丁使、之事

一、御礼如例以非藏人先議奏へ申、依差図以表使申上、右御礼今日為理計、跡御相奉行ハ御参御使二可被仰上申入候事、
「(18才)」

八日

一、来十四日礎、同廿四日立柱、右御当日奉行参仕、且恐悅申上候事哉、飛鳥井中納言へ相尋候処、両日共不及参仕・恐悅申上等、御祝酒も無之旨被答、且来廿七日上棟二ハ奉行参集、恐悅可申上、御祝酒も被出候旨、被申渡候事、

右条々御相奉行へ申入、

十四日

一、今日礎無御滯被為濟候旨、宮内届出承置、武伝へハ別段届候旨二候事、

廿四日

一、今日立柱無御滯被為濟候旨、宮内届出、承置候事、
一、来廿七日上棟被仰出候旨、野宮中納言被申渡、当日参賀之事、御祝酒可賜旨二候事、

廿七日

一、今日上棟、奉行参集、

一、上棟無滯被為濟候旨職届出、承置之事、

一、議奏以表使等無異恐悅申上畢、

一、御祝被出、強飯、白蒸、一對、一組重肴、

一、今日無滯被為濟候御祝義方金三百疋各頂戴、議奏表使等御礼如例申上候事、
「(19才)」

一、上棟式一閉、職昨日差出落手畢、

九月八日

一、飛鳥井中納言為見被渡、

上段十帖 砂子中彩色、

御床御棚張付并襖八枚・遣戸四枚共、

繪 唐太宗弘文開館 画工土佐備前守

御袋棚小襖 絹張極彩色、

繪 上四枚 飛鶴

金泥引、雲形砂子、或春天象、夏地儀、秋居所、冬雜物人事、之意、

下四枚 群亀 子亀交、岩石竹水、或和子供遊、

画工同人

次八帖 薄彩色、

襖八枚・遣戸八枚共、

繪 桜狩

画工円山応立

次八帖 薄彩色、

襖十二枚・遣戸四枚共、

繪 山陰納涼

画工鶴澤探真

次八帖 薄彩色、

襖十二枚・遣戸四枚共、『改襖八枚・遣戸八枚、』
(○朱書)

(○朱書)

繪 酈縣菊水

画工中嶋華陽

上十二帖 中彩色、

張付一枚・襖十二枚・遣戸四枚共、『改張付二枚、』
(○朱書)

繪 群鹿 草木あしらひ、 画工国井応文

十二帖 薄彩色、

襖八枚・遣戸十枚共、『落張付一枚、』
(○朱書)

繪 雪中樹木

画工嶋田雅喬

北杉戸 中彩色、

(○朱書)
『二枚、』

繪 表 車胤

画工泉春園

裏 孫康

南杉戸 中彩色、
(○朱書)
『二枚』

「 (20ウ)

繪 表 谷川虎或海棠雄、 画工星野蟬水

裏 雪洞熊或紅葉鶴、

右一紙之通御治定之旨、明後十日可令下知、且下絵伺ハ

何分出来次第早々可伺、但當奉行へ各差出取束子、從當奉行武

伝へ可差出、同卿被示候事、

但或ト有之候分ハ、本文ト兩様下絵可伺旨、同被示候事、

十日

一、一昨日武伝被申渡候御絵様并画工等、以一紙職宮内へ下知、且御下絵早々

可相伺同令下知候事、

一、右申渡候画工之内、中嶋華陽混穢中之旨、宮内申出候間、其旨」 (21才)

武伝申入候処、猶可被伺由二候事、

十四日

一、今度御間画工之内、中嶋華陽依混穢御断、右替中嶋有章へ

被仰付候旨、飛鳥井中納言被申渡、以一紙宮内へ令下知

候事、

一、去八日被渡候御絵様、書付一紙襖数戸数張付等、少々間違二而

多少不足等有之候趣、右ハ武伝二而被取調、画工之方へ可被申旨ト、

同卿被噂候事、

一、前条二付而ハ杉戸今二枚可有之処、過日書付二落有之候趣、右ハ

絵様画工共其内可被為沙汰旨、同卿被示同人被下知候事、 「 (21ウ)

十六日

一、 東宮御殿

西杉戸中彩色、 二枚

繪

表 競馬

裏 炭竈

画工 吉村孝一

右之通被被仰付候旨、飛鳥井中納言被申渡、即以一紙職

左衛門へ令下知候事、

十九日

一、過日被仰付候画工土佐以下九人請書、職左衛門差出候間、即

付于飛鳥井中納言置候事、

十月十一日

一、花御殿付御湯殿

東宮御殿江御引建二付、来十二日方

晴天五个日二而取解之上、御普請

方江相渡申度奉伺候、

十月

修理職

右職宮内伺出候間、付于加勢日野大納言伺候処、無御指支旨被申

渡候、即同人へ令下知候事、

「 (22才)

一、東宮御殿御遣水筋二付困方、以凶職宮内伺出候間、飛鳥井黃門江

指出置候処、自跡返答之旨、被答候事、

一、小時被招、水筋二付困方同之通宜旨、同卿被申渡、宮内へ令下知候事、

十七日

一、東宮御殿御上段以下御下絵各出来候、職指出、相奉行伝覽

相濟、今日付于武伝兩卿候事、

廿九日

一、有章・雅喬・蟬水等下絵書改出来、宮内差出候間、付于野宮候処、蟬水

伺之通可然、自余追而可有沙汰、仍蟬水伺之通同人へ令下知候事、

此度御築地艮隅御取広其外御普請

御用掛被仰付候付、昨年

内侍所御仮殿御造立并御本殿御

修復之節振合を以、加勢并下役加勢等

迄加扶持被下度旨、別紙修理職願書

当四月中被成御達取調候処、昨年

内侍所御仮殿御造立等之節、御取掛

以前方修理職一同日勤武辺御用掛り

申合、格別心配御用向取扱、且御場所

柄之儀二付、日々御場所見廻り者勿論、

小屋場江も罷出候儀二付、先規見合茂

無之、御扶持方金出格之訳を以被下候

儀二有之、今度御普請二付而者、右体之

勤廉無之申立方不都合二而、逆茂難

相整筋二付、彼是勘考申之処、先日

申上候通、武家普請懸り之もの共、扶持方も

当分相止ミ候之旨、所司代方達有之、尤

公武御差別者有之候得共、連日諸向方

通勤主役御用掛り之もの共迎も、扶持

無之儀旁願之趣者、不被及御沙汰方

哉与奉存候、乍去当節御用多之折柄、

今般御普請二付而者、御用掛被

仰付、御庭境高見隠・板囲・仮御廊

下等取建并新規御遣水筋付替・仮

御湯殿取解等、御手沙汰掛り二而取計

候付、右取建中日数丈々、修理職三人江

「(33才)

一个日米壺升宛、下役武人江一个日米五合宛、為加扶持御飯米之内方被下、且当

正月以来修理職加勢下役等、御場所

板囲御内庭之方夜廻り相勤候二付、

連夜相廻り候もの人数限り、加勢上役江

一个夜米壺升宛、下役江米五合宛、是又

為加扶持御飯米之内方被下置候ハ、以後

勤向之励二茂罷成可然哉と奉存候、

右二而思召茂無御座候ハ、夫々被仰渡、尚

勤日数書付之儀者、修理職方私共へ

差出候ハ、御賄頭江為取調渡方為取

計可申哉与奉存候、依之別紙願書

返進仕、此段相伺候事、

十月

「(35才)

右、野宮中納言被相渡、即職申涉候事、

十一月一日

一、過日伺雅喬下絵伺之通、有章今一応可書改、飛鳥井中納言

被示、宮内江下知候事、

松平若狭守

此程伺相済候艮隅御取広御場所、

准后御殿御構境式越堀者、御遣水

溝筋際二相成、湿気強く可有之二付、

元御厩二有之不用相成候檜材を

土台二相用、洪墨塗二致度旨、大久保

主膳正申聞候、右二而御差支も無御座

候哉、此段相伺候事、

右、飛鳥井中納言被為見、別紙之通申来候□御差支之義無

之哉、不都合之次第も無之哉、一応職江可承り被示候、職宮内尋間

「(34才)

「(35才)

之處、別段御不都合之義も無之、御内儀ニ御差支無之候得者、無御子細哉之旨ニ付、其趣同卿江申入置候事、

三日

一、過日付武士見かへし・武伝被為見候職加扶持之事、弥右之通治定、今日宮内へ申渡、於奉行無存意此通之旨、武伝へ申入候事、

「(26才)

右願書とハ少々違候間、押返し遣度事も候へとも、
右ハ段々付武士厚配、漸右ニ相成候儀ハ奉行にも□
□□有之候間、此返ニ而治定候事、

十一日

一、東宮御殿御絵下絵、伺之通被仰付、請書土佐以下九人指出旨ニ而宮内持参、飛鳥井黄門へ入覽候處、被返候事、
一、御築地良隅御取広御場所御遣水

筋付ケ方之儀、先達而御普請掛り方
伺絵図面之通ニ而御差支無之旨申付
置候處、

「(26ウ)

准后御殿御構境式越堀御取建ニ
就而者、御在来雨落溝を此度御遣水
筋ニ相成候而者、溝幅狭く且御文庫与
溝筋之間狭少ニ而、式越堀取建ニ而も
差支可申、旁別紙絵図朱引之通
付替相成候様仕度、左候得者、自ラ水行
捌方宜敷、式越堀御取建之御都合
ニも可相成儀与奉存候付、此段奉申上候、
但し雌黄引元御遣水筋、墨引元

「(27才)

御築地雨落溝等、仕埋ニ仕度奉存候、
右宮内伺出候間、付于飛鳥井中納言伺置候事、

十二月廿三日

一、御普請之内、二筋廊下年内中出来之筈候處、白土当年中不

出来候間、其俣ニ而仮引渡、御手沙汰御用ニ而白土掛候様願出候、
其旨御内儀へ野宮被相伺候處、御指支不被為在旨ニ付、来廿六日
仮引渡、武辺より申越候間、修理職へ可申渡、前同卿被噂候、
即職坪田へ令下知候、右引渡之節奉行参仕之儀相尋候
處、不及其儀、職計ニ而宜旨ニ候事、

但土乾候上御手沙汰ニ而白土ヲ掛様、是又申渡置候事、
廿七日

「(27ウ)

一、二筋廊下出来、引渡相済候旨、主税届出候事、
廿八日

一、主上御不予御大切ニ付、從今朝職人悉皆手引之事、

(慶心)
同三年

三月十七日

一、准后へ御通廊下昨冬出来ニ付、御不用ニ相成候仮廊下撤却
之木材、奉行已下へ拝領願度、申立書武伝へ差出如左、

准后江御通廊下、昨年御模様替

取建中被用候仮廊下、当時撤却有之、

右之木品、何卒奉行已下へ拝領之儀、相願

度候事、

「(28才)

三月

通善
重胤
為理

權中納言殿

野宮中納言殿

右一紙、飛鳥井落手之事、

四月九日

一、過日被仰付候御襖已下絵皆出来ニ付、調進之□過日

冷泉殿江職主税伺出候、野宮江御談之處、修理職方ニ御預り」(28ウ)

可申置被示候由、修理職部屋甚狭少心配之由申出候、今日

野宮江示談、各ハリヲ放箱申付納候上、御文庫ニ先可納置

被示、則其旨主税江令下知候事、

十日

一、日之門通御普請場小屋并会所等相残シ、不用之場所半北寄之由、

竹矢来取払ニ相成候旨、野宮中納言被囀候間、為心得職へ下知候事、」(30才)

(〇別ニ折紙ニ紙付属)

(包紙)

上

(本文)

一、此度

御築地良隅御取広・

花御殿御普請御用掛、被

仰付冥加至極難有仕合奉存候、

就而者御厩御移替等方引続

於私共茂無油断精々御用向達滞

取仕候様、專一二相心得候者勿論ニ御座候

得共、然処御常式御用茂誠以

多端之折柄、都而御用向不都合

無御座候様与甚心配罷在候、且又此度

御普請之御儀者前之御造営之

御振合与茂違ヒ、格別之御場所

柄御殿近キ御儀ニ而是又甚心配仕候、

且又伏樋御遣水等茂御普請御場所

内江相掛り御座候ニ付、

花御殿其外一纏之御用柄ニ付、恐多

御願ニ御座候得共、当春以来

内侍所御仮殿御造立并

御本殿御修復中、出格之御憐愍ヲ以私共始

加勢并下役加勢等迄、夫々加扶持

被為下置、冥加至極難有仕合奉存候、

何卒当度茂右類例ヲ以御用掛

被仰付候日限方惣而御用済迄、同様

加扶持被為下置候様奉願度、何卒

右願之通御聞済之程、偏奉願

上候、以上、

丑十二月

修理職

『艮隅御築地御取広并花御殿御模様替御用掛雑記』翻刻

〔凡 例〕

- 一、本稿は『艮隅御築地御取広并花御殿御模様替御用掛雑記』（宮内公文書館所蔵、識別番号三四三三六、一冊）を翻刻するものである。
- 一、翻刻は通行の方針に倣う。
- 一、改行は底本のままとする。
- 一、文字は通行の字体に改め、読点および並列点を加える。
- 一、改丁の箇所には「」を付し、丁数を示す。

〔翻 刻〕

（外題）

（○朱書）
『梅溪通善手記写』

艮隅御築地御取広并
花御殿御模様替御用掛 雑記

慶応元年

（本文）

通善

艮隅御築地御取広并
花御殿御模様替御用掛 雑記

慶応元年

「（1才）

十一月十九日

- 一、今般艮隅御築地御取広并花御殿御模様替等
御普請御用掛修理職奉行三人被仰出ル旨、
三條大納言被申渡、今日内侍所本殿御修覆
出来引渡二付、奉行参集被申渡、各御受申上候

事、但今日御徳日之間、
可為昨日之分云々

- 一、右御用掛承、尤武伝御用掛之旨二付向候所、萬

事宜頼入旨、申入了

廿日

修理職

中川宮内

広瀬左衛門

下川辺主税

下役 惣一郎

平三

右今度御用掛被仰出御礼万事宜頼度等、以

手札奉行里亭江来候事、

卅日

- 一、来月三日巳刻木造始被仰出ル旨、為心得武

伝被示、尤略式之儀、奉行不及参仕之旨也、

十二月二日

- 一、准后東之方御築地瓦取払二付、目隠仕様、以絵

図職伺出、付于武伝伺之通被申渡、職へ下知候

事、

- 一、飛鳥井中納言被示、今度御用之儀、過日以来聊

武辺往来之儀有之、一々被申兼候間、帳面被相

渡、一覽可有之旨、借用書写之事、如左、

十一月十七日

見かへし

△以下

松平若狭守

禁裏御築地艮隅御取広其外仕越御普

請二付、御用掛被仰付候迄掛リ之者

名前

松平越中守与力

「（2才）

「（2ウ）

「（3才）

竹内盛之進

瀧川讃岐守組与力

野村鉄三郎

三浦錦次郎

長井筑前守組与力

平塚表次郎

松平若狭守与力

梶川文吾

遠山隠岐守組与力

堀内兵藏

御普請役

荒堀豊太郎

越中守同心

上田恭造

讃岐守組同心

^(太)吉田岩之助

平川鉄藏

浅賀悌次郎

筑前守組同心

吉竹徳藏

若狭守組同心

鈴木幸太郎

堤紋次郎

隠岐守組同心

中村広吉

^(小)本堀数馬元々手代

林田式之助

┌
(3ウ)

┌
(4才)

┌
(4ウ)

同人手代

浅田次三郎

中村麦右衛門

西村吉次郎

森嶋栄三郎

人見為助

中井保三郎支配

御扶持人棟梁

池上幸太郎

頭棟梁介

岡嶋日向掾

平棟梁

今村加賀掾

大東相模掾

長谷川猶之助

^(衆)堀内幸太郎

外ニ讃岐守組同心見習

御用会所書物介

松本又市

御場所柄ニ付当分昼夜見廻リ

松平若狭守組与力

水野四郎右衛門

遠山隠岐守組与力

佐久間啓次郎

若狭守組同心

鈴木安太郎

隠岐守組同心

┌
(5才)

┌
(5ウ)

山崎善吉

右之通ニ御座候事、

十一月

「(6才)

見かへし

松平一

今般御築地御取広并御厩引移替御普請之儀者、御殿内ニ拘リ候儀とも無之候間、右御用取扱之面々、平日上下等着用仕候而者、御場所見届方萬端不弁理之儀有之候、何分御用弁專一之儀ニ付、御補地内ニ取掛候上ハ、御築地御取広并御厩取解引建替之御場所々々掛之面々白衣ニ而相勤候而も御差支無之哉之旨、瀧川讃岐守申聞候付、否被仰聞候様仕度、此段相伺候事、

十一月

「(6ウ)

書面之通、差支無之候事、

十八日

冷泉中納言

庭田中納言

梅溪宰相中将

艮隅御取広并花御殿就御模様替御普請

御用掛被仰出候、為御心得申入候、以上、

十一月二十日

野宮中納言

飛鳥井中納言

松平越中守殿

松平若狭守様

飛鳥井家雜掌

「(7才)

遠山隱岐守様

野宮家雜掌

冷泉中納言殿

庭田中納言殿

梅溪宰相中将殿

「(7ウ)

以手紙致啓上候、然者

艮隅御取広并花御殿就御模様替御普請御用掛被仰出候、此段為御心得御達被申候、松平越中守殿へも被相違候、仍可申入旨、兩卿御申付、如此候、以上、

十一月二十日

冷泉中納言

庭田中納言

梅溪宰相中将

艮隅御取広并花御殿就御模様替御普請

御用掛被仰出候旨、為御心得被仰聞致承知

候、以上、

十一月廿日

松平越中守

飛鳥井中納言殿

野宮中納言殿

見かへし

松平一

禁裏御築地艮隅御取広其外御普請仕越取掛二付而者、右御取広地所并有栖川宮へ被下候二付、後院後江御引移相成候御厩、且凝華

「(8ウ)

洞内御土蔵御取建場所等引渡方之儀取計

候様、松平越中守より相違候処、右之内御築

地御取広之御場所、有栖川宮御住居建物等

御取解引移不相濟候二付、先御構外諸式之

分丈ケ為繰受取候様、其余御厩并凝華洞内御

土蔵御取建物^場所者、請取方之儀、類例之振合

を以、明後廿八日巳刻、前書御築地御取広之

御場所道式之方者、修理職より越中守与力

江請取、私共組与力立会、御普請取扱掛之も

の江引渡、御厩并凝華洞内御土蔵御取建場

所之方者、修理職与私共組与力江請取、御普

請取扱掛之もの江引渡可申与奉存候、将又

右之外、後院後木柵内地所二付、同御門

小屋場地等之儀者、此程仮請取相濟候儀二

付、改而請取渡し不仕様ニ御座候、右ニ而御

差支之儀も無御座候哉否、早々被仰聞候様仕

度、此段相伺候事、

十一月

付札、

書面之通ニ而御差支

無之宜被取計候事、

「(9才)」

見かへし

松平一

今度御取広御築地通り地形高低見積等為

手繰、有栖川宮御構内江折々棟梁職人共差

遣、時宜ニ寄御用取扱之面々も為入込申度旨、

瀧川讃岐守申聞候二付、此段右宮へ御通置

可被下候事、

十一月

付札、

書面之趣ニ相通候処、承

「(10才)」

知之趣ニ候事、

松平一

今度禁裏良隅御取広其外御普^々二付、十津

川郷中^方令献木運送之儀二付、差支無之様宜

取計旨、御通被成、松平越中守へ相違候処、右

者願之通承置候二付、木材至着日限前広ニ

御達相成候様、御両卿方へ可申上旨、申聞候

二付、此段申上候事、

十一月

「(10才)」

良隅御取広木作始日時

十二月二日

癸巳時已

同 三日

甲午時已

同 八日

己亥時已

十一月廿八日

陰陽助保源

見かへし

松平若狭守

良隅御築地御取広取掛リニ付而者、猿ヶ辻

通往来、竹矢来ニ而^へ切候儀、伺相濟候通、今

廿八日^方竹矢来ニ取掛候積、依之諸往来差

止候儀、瀧川讃岐守^方申聞候二付、向々へ御

通置御座候様仕度、此段申上候事、

十一月

「(11才)」

松平一

猿ヶ辻通往来竹矢来二而、切後、有栖川宮御家来等御建物不残被引払候迄者、是迄之通用門方往来可被致候而者差支候分、竹矢来中通行之儀、御家来向者名前書兼而被差出置、中間之分者鑑札二而通行可為致積、右二付名前書并印鑑等被指出候様、瀧川讃岐守方申聞候二付、其段右宮へ御達奉被下候事、

十一月

此度御築地良隅御取広御普請二付、右御普請中猿ヶ辻御警衛中川修理大夫江同所御警衛兼勤被申付、徳川元千代并南部美濃守丹羽左京大夫御警衛所、右御普請所最寄之儀二付、心付候積相達間、此段為御心得申進候事、

王相祭・土王祭等日時

十二月五日 丙申時巳

同 八日 己亥時巳

十一月三十日 陰陽助保源

御方角之事

常御殿夜御殿より

良宮隅御取広ケ相成候儀、子之宮ヨリ丑之宮相属、此節王相所在、明年二月五日ニ至而不宜、且来月二日ヨリ土用二付、土用中是又

不宜候、

但、王相祭・土用祭^{〔三〕}勤修被仰付候、半々御方忌御差支聊無御座候

十一月三十日 陰陽助一

奉願口上之覚

王相祭・土王祭之儀、都而除方忌祭同様之祭二而、先規御下行之儀多少御座候へ共、何分當時諸品高価之時節、甚以難渋仕居候二付、何卒先規二不拘、白銀五枚ツ、拝領可被仰付候様奉願度、何卒御憐愍之御沙汰ヲ以、願之通可被下置候様、伏而奉願候、此段宜御沙汰被下候様奉願候、以上

十一月三十日 幸徳井陰陽助

松平一

御築地御取広其外御普請木造始略式日時、来月三日巳刻被仰出候处、瀧川讃岐守儀就御用出難罷出、是迄差障等二而不罷出相濟候振合も有之、殊略式之儀ニも御座候間、欠席仕候之積、右二而御差支無御座候哉、讃岐守方申聞候二付、否被仰聞候様仕度、此段相伺候事、

十一月 伺之通二而、御指支無之候事、

良隅御取広并花御殿就御模様替御用掛当役兩人被仰出候、為御心得申入候事、

十一月

「(14才)

松平一

艮隅御築地御取広御普請之儀、御場所柄御手薄二も有之、新規御築地出来迄、出来御築地其俣差置候之様、御両卿方御沙汰之趣二相心得、手組取計居候得共、何分御新築御築地堅新二而者、御成功緩急二拘り候之訳等を以、在来者之内御遣廻し打合候之趣、屋根ノ廻リ御遣廻ハ相濟候趣相答候二付、御修築果敢取茂宜聊安慮仕候旨、然ル処猶御場所取扱之面々、実地経検速成手順調候得者、有栖川宮在来練堀者、今度御取広御築地修築二付、即日不残不取払共不差支候付、別紙図面朱引之通、朔平御門横手右宮構取付迄并猿ヶ辻同断取付迄之处、新規御築地築足、其余者右宮構練堀并御門等ハ扉関貫ベリ丈夫二付ケ置、外側竹矢来・板囲・在来御築地、内側板囲共取計候者、都合三重之御締二相成、敢而御用害二拘り候程之儀無之哉二付、絵図飛朱之分者、在来御築地取壊引建二者相成間敷哉、再応之談二者候得共、第一御築地御成功遅速二寄、花御殿御引移期節二も相係り、御国事多端莫太入費有之折柄候得者、前頭差略二依、夥敷人力冗費を省、萬端簡便二相成候儀、何卒御用掛り之御方々二而も、御怒察御勘弁相成候様、訳二而御談可申旨、瀧川讃岐

「(15才)

守申聞候付、厚勘弁仕候処、素々在来御築地其俣差置、新築出来候様与之御儀者、御場所柄御守衛御手薄故之儀与相心得候二付、前書讃岐守申聞候通、三重之御囲二罷成、聊御不締之儀無之候付、何卒右二而御宥被下間敷哉、尤新築在来御築地取合之处、不目立様御出来、此心を用御成功可取計旨、讃岐守江相達可申与奉存候付、此段相伺候事、

十二月

△以上 但図面写略之、

「(14ウ)

一、来五日巳刻王相祭・土主祭御治定付而者仮家入用、右取建候旨、宮内届出候事

一、今度御用、從初発悉皆相濟候迄、先比

内侍所御修覆中、以例修理職加扶持拝領之段願書差出然処、未御築地御取広、漸取掛位場所先奉行預置、明春可付于伝奏示談、猶奉行勘考之旨、申答置、

三日

一、木造始無異相濟之旨、宮内届出候事、

七日

一、艮隅御築地御取広御普請之儀、御場所柄御手薄二茂有之、新規御築地出来迄在来御築地其俣二差置候之様、御両卿方御沙汰之趣二相心得、手組取計居候得共、何分御新築地皆新二而者、御成功緩急二拘り候之譯を以、在来者之内御遣廻シ打合之处屋根廻り御遣廻ハ

「(16ウ)

「(16才)

「(15ウ)

相済候趣相答候二付、御修築果敢取茂宜聊

安慮仕リ旨、然処猶御場所取扱之面々実地

経檢速成手順取調候得者、有栖川宮在来練

堀者、今度御取広御築地修築二付、即日不殘

不取払共不差支候間、別紙図朱引之通、朔

平御門横手右宮構取付迄并猿ヶ辻同断取

付迄之处、新規御築地築足、其余者右宮構練

堀并御門等扉関貫ベリ丈夫二付置、外側竹

矢来・板囲・在来御築地、内側板囲共取斗候者、都

合三重之御締二相成り、敢而御用害二拘り

候程之儀無之哉二付、絵図飛朱之分者、在来

御築地取壊引建二者相成間敷哉、再度之談二ハ

候へ共、第一御築地御成功遅速二寄、花御殿

御引移期節二茂相係り、右当節御国事多端

莫太入費有之折柄^ニ候得者、前頭差略二依、

夥敷人力冗費を省、萬端簡便^ニ相成候儀、何

卒御用掛リ之御方々ニ而茂、御恕察御勘弁

相成候様、訳ニて御談可申上旨、瀧川讃岐守申

聞候二付、厚勘弁仕候处、素々在来御築地其

促差置、新御築出来候様与之御儀者、御勘所^御

柄御守衛御薄故之儀与相心得候二付、前書讃

岐守申聞候通、三重之御囲ニ罷成、聊御不締

之儀無之候二付、何卒右ニ而御宥被下間敷

哉、尤新築在来御築地取合之处、不目立様御

出来形心を用御成功可被計旨、讃岐守へ相

達可申与奉存候二付、此段相伺候事、

右一紙、武伝被見且図同上写取返却候事、

八日

見かへし

松平若狭守

松平越中守与力

田中団三郎^田

大嶋安太郎

右同人同心

大野安右衛門

中川龜之助

土橋寅次郎

中川寅五郎

右此度

禁裏御所御取広御普請場退却、見廻り申付

候旨、越中守方申越候二付、此段申上候事、

右野宮中納言被相渡、書写返却、

十二日

見かへし

松平若狭守

一、御築地御普請中、仮土堀取建之儀、打合相済

候二付、内外竹矢来・板囲、取補理候積、然ル处、

外囲之内、有栖川宮御構東側折廻り土堀之

儀者、差向不取払共於宮御差支無之候ハ、

別紙絵図面朱引之分者、矢来之代リ右土堀

を相用候方、御締茂慥ニ可有之与奉存候間、

右ニ而御差支茂無之候ハ、右土堀取締之

儀、御築地出来迄御見合相成候様仕度旨、瀧

川讃岐守申聞候二付、右ニ而御思召茂無御

「(18才)

「(17ウ)

「(17才)

「(18ウ)

「(19才)

「(19ウ)

座候ハ、其趣有栖川宮へ御達置被下度、別紙絵図面掛御目、此段相伺候之事

十二月

右一紙・図等、野宮中納言被見、書写返却候事、

一、見かへし

松平若狭守

松平若狭守組与力

小野四郎右衛門

遠山隱岐守組与力

佐久間啓次郎

若狭守組同心

鈴木安太郎

隱岐守組同心

山崎善助^(書)

右

禁裏御築地艮隅御取広并花御殿御模様替

御普請御場所、当分昼夜見廻り申付置候処、

此段右御場所二昼夜見廻り申付候二付、此

段申上候事、

十二月

見かへし

松平若狭守

小堀数馬倅

小堀右膳

右

禁裏御築地艮隅御取広其外仕趣取掛候二

付、御普請小屋場等へも右膳召連罷出候様

仕度旨、松平越中守へ申聞候処、申出候通相心得可申旨、相達候段、瀧川讃岐守申聞候二付、此段申上候事、

十二月

以上、武伝被見書被見、書写返却候事、

十五日

一、御取広御地面、新規築建御築地形縄張出来二付、

明後十七日巳刻為見分武伝両卿被向候間、

当奉行二も申合、一人可見分、職へも可下知、

但飛鳥井家へ参集等、野黄門被示、宮内へ令

下知候事、

但御用掛義一人二而者、御場所不覺悟之

間、各参向治定之事、

十七日

一、御築地縄張見分二付、冷泉家へ集会、然処庭

田依所勞不参之旨、冷泉同伴向飛鳥井家、小

時両伝出会、同道向御場所、掛之面・付武家・町

奉行以下各出迎、中井保次郎誘引、所々見分

為相濟、今日衣体衣冠・狩衣可為勝手、過日伝

奏被示、今日衣冠・直衣等、午刻過帰了

廿日

一、大將軍并金神等除方忌祭被仰出、只今相

濟旨、職広瀬届出候事、

廿七日

見かへし

松平若狭守

禁裏御築地艮隅御取広付功被仰付候之処

「(20才)

「(21ウ)

「(20ウ)

「(22才)

「(21才)

「(22ウ)

更ニ御用掛被仰付候者名前

松平越中守与力

竹内盛之進

瀧川讃岐守与力

野村鉄三郎

長井筑前守

平塚表次郎

松平若狭守組与力

梶川文吾

御普請役

荒堀豊太郎

越中守同心

太田岩之助

平川鉄蔵

筑前守元組同心

吉竹徳蔵

若狭守組同心

鈴木幸太郎

遠山隠岐守組同心

中村広吉

小堀数馬元^ノ手代

林田式之助

同人手代

浅田次三郎

中村麦右衛門

西村吉次郎

中井保三郎支配

「 (23才)

御扶持人棟梁

池上幸太郎

頭棟梁 岡嶋日向掾

平棟梁 今村加賀掾

大榎相模掾^(重)

長谷川猶之助

堀内条太郎

外ニ讃岐守組同心見習

御用会所書物助

松本又市

右之通御届候事、

十二月

見かへし

松平若狭守

瀧川讃岐守

小堀数馬

禁裏御築地良隅御取広、先御用取扱被

仰付候处、更ニ御用掛り被仰付候、

松平若狭守

右同断ニ付、更ニ御用取扱被仰付、

中井保太郎^(三)

御入用取調役 渡辺啓之助

右前同断ニ付、更ニ御用取扱被仰付、

右之通、松平越中守相達候事、

十二月

右一紙、

是ニ紙、野宮中納言被為見、写取返却候事、

「 (24才)

「 (24ウ)

「 (25才)

一、凝花洞御廐御覽所良隅御取広ケ之御場
所へ被引候旨、為心得野宮中納言被示、修理
職へ令下知候事、

」 (25ウ)

(慶長)
同二年正月十五日

一、 見かへし

松平若狭守

坂本柳左衛門当地諸入用立会御用として
致上京候、右者御所之御賄向惣御入用立
会之儀者出役不致積、尤御入用筋之義二付
而者、自然引合候儀茂有之、且御普請御修
復之儀茂、時宜ニ寄場所見置不申候而者、不
都合之儀茂有之節者、罷出役々申談候儀茂
可有之候間、得其意其筋二ハ可被達置候、
右之通松平越中守申聞候二付、此段申上置
候事、

」 (26才)

正月

右一紙、為心得飛鳥井被見、写取返却了、

十九日

一、良隅御築地明廿日方取壊伺済之旨、付武
家方申越候間、御庭御境堺板囲一重ニ相成
候付而者、同夜方私共御遣水御庭一円并板
囲非常口方御詰所等、夜廻可仕哉、此段奉伺
候、

」 (26ウ)

正月十九日 修理職

但シ内侍所御修復中御門外加勢

之者夜廻リ為仕候積ニ御座候、

右宮内差出、付于議奏被伺候処、尤可然、夜廻リ

戌刻・子刻等兩度可廻之旨、議奏被申渡、職へ下
知之旨被示聞、

廿八日

」 (27才)

乍恐奉願上口上

一、良隅御築地御取壊二付、先日方連夜々廻被
仰付、則相勤罷在候処、當時御勘定向種々
手込候仕立方可相成御座候処、此比別而
御錦台御建替并聴雪御屋根御葺替並其外
所々御修復二而御用繁二付、加勢之者仕ル
助ケ為致居候次第第二御座候処、連夜兩度夜
廻り仕候而者、彼是御用繁奔走、身体難相障
哉与心配仕候間、何卒一个度者御使番二而
相廻候様、被仰付被下候ハ、難有仕合奉存候、
此段伏而奉願上候、以上、

」 (27ウ)

正月 修理職

右被出之間、付于二位中将伺置候事、

廿九日

一、昨日付于二位宰相中将重職願書之儀、不無
理筋ニ相聞候間、願之通職戌刻廻リ、子刻鳥
飼可廻被仰出、尤鳥飼へ者議奏衆可有沙汰
旨、被示仍職内へ令下知候事、

」 (28才)

三月五日

一、花御殿御模様替御治定、図一紙野宮中納言
被為見直写、職宮内へ申付候事、

七日

一、申付図写出来之旨二而、宮内持参預置候事、

八日

一、過日被渡図、本紙返却于野宮中納言了、
四月廿五日

「(28ウ)

一、從禁中文箱如左、

御安全恐賀候、抑一寸入御一見度物有之
候間、乍御苦勞明日午刻比御參可給候、仍
早々如此候也、

四月廿五日

冷泉殿

庭田殿

定功

梅溪殿

右加參返却了、

「(29才)

廿六日

一、午刻前参内、相揃之上届于野宮黃門、小時
被招、東宮御殿御造立入込候御場所建図
被見、猶一図并御建具等武辺書取、同被見之、
各一覽、猶明日可及返却申答、而於建図者修
理職為致一見自後彼卿江面職可及返却旨、
其分職へ申達了、如左、

一、東宮御殿

一、拾帖御間

「(29フ)

御床コ張付

御違棚廻り張付

御袋棚御地袋御小襖押紙、御小襖大縁裂

地模様、追而手本裂ヲ以相伺候積り、

西側東側御襖

右御絵、砂子中彩色之積、

一、東八帖御間

北側西側御襖 押紙、泥引、
右御絵、薄彩色之積り、

一、東拾貳帖御間

「(30才)

東側南側西側御襖并張付

押紙、右御絵砂子中彩色、

一、西拾貳帖御間

東側南側御襖并張付

一、中八帖御間

東側北側西側御襖

一、西八帖御間

北側東御襖

右御絵、墨絵付立之積、押紙ニ、泥引薄彩色、

「(30ウ)

一、北御縁座敷西仕切杉戸

一、南御縁座敷中仕切杉戸

一、西御縁座敷北側仕切杉戸

一、右御絵、中彩色之積、

一、御縁座敷内仕切遣戸裏張付

右鳥之子紙白張之積、押紙、何れも御襖同
様絵、

一、御次拾貳帖・六帖・拾帖・八帖三ま、・二帖共御
間仕切ニ御襖

右鳥之子紙白張之積、

右宅紙、

見かへし

「(31才)

松平若狹守

東宮御殿御新造被仰出候付、御間取其外

仕様等、過日絵図面を以相伺候処、御兩卿御

仕様等、過日絵図面を以相伺候処、御兩卿御

方御答之趣、朱書掛紙三个所之内、二筋御廊下床上ケ・女中廊下取建之儀者、絵図面二而者巨細相分り兼可申候之間、建起図取組、猶又相伺候旨、且右御殿御構二越堀之儀者、外並之通、母材相用可申儀二候得共、母材払底之儀元過日伺済之通之次第二付、檜・榎材取交取建之積、且亦御殿向始御張付・御襖等、花御殿二働取調、別紙絵図面二相印付、書付相添差越、尤御絵様并御絵師人体之儀者、從御所表御取極申上被仰出候積、相心得申候旨、夫々為手繰打合候段、瀧川讃岐守申聞候二付、別紙絵図一枚・書付老通并建起図等相添、此段相伺候事、

四月

六月廿八日

一、良隅御普請二付高見隠取建、別紙絵図面之通、来ル朔方取掛り、日数十五个日二而出来仕度旨、右御用掛り申出候二付奉伺候、

寅六月

修理職

右宮内差出候、付于加勢治部卿相伺候处、今日無御返候間、退出了、

廿九日

一、從禁中文箱如左、

良隅御普請二付高見隠伺書一日より取

掛之儀、御内儀差支有之、追而御沙汰可有

之條、三條前亜相被申渡、即職へ令下知候、

仍申入候也、

六月廿九日

重胤

冷泉殿 梅溪殿

七月十八日

一、從禁中文箱如左、

過日武伝江差出候御普請高見隠围方、花

御殿へ余リ近ク相成、御目障相成候間、相成候丈北

へ寄可取建、図面更ニ引改、以議卿可伺野

宮中納言被申渡候、主税示命候、然処今

日不出来候間、出来次第可付同人へ申付

置候、仍申入候也、

七月十八日

重胤

冷泉殿 梅溪殿

廿日

一、從禁中文箱如左、

過日庭田殿御示候見隠図書改出来、宮内

差出候处、花御殿方八間明キ向ニ取建ニ

相成候、右故宜と存候、幸野宮被参居候間、一

応見セ、其上過日御示之通申述、議奏広橋

へ付置候、仍申入候也、

七月廿日

為理

庭田殿 梅溪殿

廿三日

一、過日伺相成候良隅御普請高見隠、図面之通

被仰出、且何日より取掛哉御尋二付、即

職宮内へ下知、取掛日限相尋候处、御指支不

被為在候ハ、從明日二而も取掛度、尤四・五

日中出来之旨、其旨加勢右京大夫へ申入相

「(32才)」

「(33才)」

「(31才)」

「(33才)」

「(32才)」

「(34才)」

伺候処、從明日可為掛被仰出候旨、前同
卿被申渡、宮内へ令下知候事、

廿六日

一、從禁中文箱如左、

来月五日辰刻 木造始 但略式於
小屋場

同十一日巳刻 除方吉祭

同十四日辰刻 礎

同廿四日辰刻 立柱

同廿七日辰刻 上棟

右御治定之旨、武伝飛鳥井中納言被申渡
候、別紙認宮内へ令下知候、仍申入候也、

七月廿六日

為理

庭田殿 梅溪殿

八月二日

一、從禁中文箱到来如左、

御普請二付木造始已下被仰出候内、地曳
之儀、不被為在茂如何二付、更幸徳井へ勘文
被仰付、

来ル五日辰刻 地曳

右之通御治定之旨、武伝被申渡、木造始式畢、
引続地曳之旨、同被示候、職加勢坪田へ及下
知候、仍申入候也、

八月一日

為理

庭田殿 梅溪殿

四日

一、明五日本造始二付、御造営掛御祝酒、先例之
通可被下哉、職宮内伺出候間、飛鳥井へ及訊

間候処、可賜之旨被答、職へ申渡候事、
一、同上二付、奉行江も可賜候旨、明日可参集同
卿候事、

一、明五日本造始二付、図式枚、二通、役付一通等、

職宮内差出落手候事、但何へも不指出、奉行
抑留

右条々相奉行へ申通了、

五日

五日

一、東宮御殿木造始、無滞被為濟候旨職届出、奉
行所参恐悦申上如例、庭田不参、

一、右二付御祝酒賜之、赤飯・重台・肴等也、
尤吸物有之、不及

御礼、各指貫着用、

七日

一、從禁中文箱如左、

東宮御殿木造始、過日被為濟候二付、御祝儀
奉行一同へ賜之候旨、広橋大納言於役所被
申渡候、御自之被渡、(目六)

金貳百疋宛

右第一へ束被相渡、拝受候、仍其他申入御
礼之儀者如例、御祝儀一兩日之内御申上可
給候、仍申入候也、

八月七日

為理

庭田殿 梅溪殿

八日

一、東宮殿礎立柱等、当日奉行不及参賀、廿七
日上棟参集恐悦言上、御祝酒可賜之旨、飛鳥
井中納言申渡候、仍申入候也、

「 (35才) 」

「 (34才) 」

「 (35才) 」

「 (36才) 」

「 (36才) 」

「 (37才) 」

八月八日 為理

十四日

一、今日春宮殿礎無御滯被為濟旨、為理參合、
宮内届出承置候、為御心得申入候也、

八月十四日 為理

廿四日

一、從禁中文箱、

今日立春宮殿立柱無異被為濟候旨^{宮内}届出、
承候、仍申入候也、

八月廿四日 重胤

冷泉殿 梅溪殿

廿七日

一、東宮殿上棟ニ付奉行參集、午前衣冠・差貫參
内、午刻過無異被為濟旨職三人届出、且恐悅
申上承置、此後奉行一統恐悅申上、議奏表使
了、御祝酒拝領、白蒸・台重・肴等也、未刻過退出
了、

廿九日

一、從冷泉廻状至來如左、

野宮中納言

艮隅御建広御普請御用掛依所勞理被
聞召候、御相奉行中へも可示聞候也、

八月廿八日

右之通被触候、仍申入候、御廻覽可返給候也、

同月廿九日

源中納言殿 源宰相中将殿

九月八日

一、從禁中文箱到來如左、

春宮御殿御襖已下御絵様御治定之分、別紙
之通之旨、飛鳥井被見渡候、右ハ兩下知可然
被為候間、明後十日從武伝可被為下知之間、
從奉行茂同日下知被頼度旨被示候、甚恐入
候へ共、梅溪殿御当番候間、御參候ハ、宜御
下知願度候、別紙御覽ニ入候旁差上候、若^{ツマ}若
御商量給候ハ、四折御落手置願入候、切紙之
分武伝へ返し候間、可返給候、重々畏入候へ共、
宜積りなから一寸御見合偏ニ願入、仍申入
候也、

九月八日 為理

庭田殿 梅溪殿

已下本文落シ候、右一紙職へ下知之
時、

下絵一个日一度も早ク出来次第當奉行へ
各可差出事、

此内或ハ申分ハ兩様とも下絵可

伺事、

下絵各出来差出候ハ、取束子從當

奉行伝奏へ可付事、

右同卿ノ噂候也、

東宮御殿

上段十帖 砂子中彩色、

御床御棚張付并襖八枚・遣戸四枚共、

繪 唐太宗弘文開館 画工土佐三河守

御袋棚小襖 絹張地極彩色、

「 (37ウ) 」

「 (39才) 」

「 (38才) 」

「 (39ウ) 」

「 (38ウ) 」

「 (40才) 」

繪 上四枚 飛鶴金泥引、雲形砂子、

或春、天象、夏地儀、秋居所、冬雜物人事、之意、
下四枚 群龜子龜交、岩石竹水、あしらひ、

或和子供遊、

画工同人

次八帖 薄彩色、 襖八枚・遣戸八枚共、

繪 桜狩 画工円山応立

次八帖 薄彩色、 襖十二枚・遣戸四枚共、 『(40ウ)』

繪 山陰納涼 画工鶴沢探真

次八帖 薄彩色、 襖十二枚・遣戸四枚共、
○朱書『改襖八枚、遣戸八枚、』

繪 酈縣菊水 画工中島華陽引籠二付、

中島有章へ被仰付、

○朱書『改張付二枚、』

上十二帖 中彩色、 張付一枚・襖十二枚・遣戸四枚共、

繪 群鹿 草木あしらひ、画工国井応文

十二帖 薄彩色、 襖八枚・遣戸十枚共、
○朱書『落張付一枚、』

繪 雪中樹木 画工嶋田雅喬

北杉戸 中彩色、
○朱書『二枚、』

繪 表 車胤 裏 孫康 『(41才)』

画工泉春園

南杉戸 中彩色、
○朱書『二枚、』

繪 表 谷川虎 或海棠雉

裏 雪洞熊 或紅葉鵲

画工星野蟬水

十日

一、東宮御殿御襖御繪様御治定之分画工被

仰出候間、以一紙職宮内へ申渡、且下絵早々

可相伺同下知候事、 『(41ウ)』

一、被仰出候画工之内、中島華陽混穢二付如

何哉同人伺出候、其旨飛鳥井黄門へ申入候

处、猶被伺條被答了、

十四日

一、從禁中封箱到来、

一、東宮御殿御間絵之内、画工中島華陽依混穢

御断申上、過日梅溪殿武伝へ御届有之候付

而ハ替、

中島有章 『(42才)』

右者被仰付候旨、飛鳥井被申渡、以一紙宮内へ知候事、

一、同殿御絵被仰付候襖数戸数杉戸数張付

等、過日相渡候書付ニハ少シ間違多少又不

足等有之候ニ付、猶篤与被取調、跡之数ハ從

武伝画工へ被申渡候旨、同卿被示候事、

宮内面会候处、右弥之数ハ委細二分リ有

之承知ニ候、然シ夫者職丈之事ニ候間、何

レ從武伝被申渡候とも、又々奉行へ被示

候哉とも難計、猶御心得置可給候、

『(42ウ)』

十六日

一、東宮御殿

西杉戸 中彩色、 二枚

繪 表 競馬 裏 炭竈

画工 吉村孝一

右被仰付候旨、飛鳥井被申渡、以一紙職左衛門

へ令下知候事、

一、同殿御襖・遣戸折敷等過日被仰出候節、間

違之通改可下知同卿被示候間、付紙二而相

尋候処、其分二而可然与二候、仍同人へ下知、右

之通二而受書可差出申付置候事、

但被改候分以来書直之者也、

一、御造営御絵被仰出候、先例於武伝宅土佐・鶴

沢被召出、先雜掌右両家へ御問申渡、即両家列座

之所へ他之画工召出、雜掌御門々々申渡之

事、

一、禁中江土佐・鶴沢奉行より以職召寄置、但他

之画工も同召寄置、於絵師部屋当奉行職列

座、但御造営掛次有之候者同列座、右両家よ

り可申渡、『割注』行ナリ、○朱書尤武家玄関二而職立合、両家より

申渡一段申渡事、

右之通御造営御用被仰付、先例之旨也、内

々職迄従土佐・鶴沢申出之旨、左衛門申聞之

間、至極尤、於奉行者不案内、先例相違之儀氣

毒之至、猶相奉行示談、可取計旨申置、武伝・飛

鳥井へも内々申談置候事、

十七日

一、行向冷泉家、黄門面会、画工内々申分委細

示談、先例不覚之儀、奉行無念之間、其分數願

書差出サセ、其上二而先例之通申渡候分可

相心得申渡、尤奉行并職等書記右都合可書記

之間、於画工茂如先例可有書記可申渡治定

帰宅、此後以書状右願書従職第一冷泉家へ

持参可有之申達了、

「(43才)

十八日

一、従冷泉書状、昨日示談一件職願書持参候間、

如示談相被達候旨、被示越了、

十九日

一、御絵御用被仰付画工各受書差出候旨、職

左衛門持参、依之付飛鳥井了、

十月四日

一、従禁中文箱到来、

一、東宮御殿御襖御杉戸等之画工土佐・鶴沢・円

山等、少々延日願之由、其外御下絵伺候旨、

昨日主税持参候、仍入見参候、今日飛鳥井

面会尋候処、未格別二御急二而無之、同ク

ハ各揃上可差出被示候事、

孝一競馬之絵甚以不宜候間、是ハ飛鳥

井へ示談、別段御覽二不入候得とも、一日

二而も早キ方と書改申付候事、

十月三日

為理

庭田殿

梅溪殿

已下今日御返し候ハ、右下絵奉行

担子三有之候中之担子引出二入置

候也、

十一日

一、花御殿付御湯殿、東宮御殿江御引建二付、

来ル十二日方晴天五个日二而取解之上、御

普請方江相渡申度奉伺候、

十月

修理職

「(44ウ)

「(45才)

「(45ウ)

一、東宮御殿御庭御遣水筋二付囲方、以図宮内
「(46才)

伺出候間、付于飛鳥井中納言伺候処、可為伺之通
被申渡、同人へ下知候事、

一、土佐・鶴沢・応立・孝一等御下絵伺候旨、宮内指

出候、然処土佐未出来之分、依所劳来十四日

迄御猶予相願候間、願之通申渡候、差出候分

飛鳥井へ入一覽候処、孝一競馬之図今少不

都合、今一応可書改方歟、同卿ニも噂、自余至

極可然旨持返預置、孝一分書改之事、宮内へ

令下知候事、

十五日

一、從禁中文箱到来、

一、土佐・吉村等御下絵差出候、仍入見参候、明

日為理参仕候得共、之番ニ退出每恐入候

得共、明後日梅溪殿御当番御参候ハ、右下

絵各揃候間、武伝へ御付之義、偏希入奉存候、

先条々申入候也、

十月十五日 為理

庭田殿

梅溪殿

已下梅溪殿へ申入候、明後日御参番、御

下絵武伝江御付之方御掌様候ハ

ハ、右下絵御抑留可給候也、

十七日

一、東宮御殿上段以下御下絵各出来候ニ付、付于

武伝両卿伺置候事、

十九日

一、從禁中封箱到来、
「(47才)

一、東宮御殿金物類等此通りニ而宜哉、一応職
江可為見参左衛門江為見置候、明日返上之

旨申出候、番頭氏方明日返却之事申付置候、

一、過日御絵各如何之内、

一、中島有章

菊余り野菊之様候間書改、人物ニ而も可入

事、

一、嶋田

雪中樹木少々淋し、可改小鳥可入事、

一、星野
「(48才)

鬼熊之方御治定、熊ノ方洞工合可直候事、

一、土佐

鶴亀御治定、

一、孝一

競馬不并方御治定、

其余各伺之通野宮被申渡、左衛門江下知候、

一、此迄宮御殿卜申八帖二間有之候、此度花御殿

御場^(邊)跡江取建候様可取調被示候、左衛門下

知候事、

廿九日
「(48才)

見かへし

松平若狭守

此度御築地良隅御取広其外御普請御用掛

被仰付候付、昨年

内侍所御仮殿御造立并御本殿御修復之

節振合を以、加勢并下役加勢等迄加扶持被

下度旨、別紙修理職願書当四月中被成御達

取調候処、昨年内侍所御仮殿御造立之節、

御取掛以前方修理職一同日勤武伝御用掛

り申合、格別心配御用向取扱、且御場所柄之

儀二付、日々御場所見廻り者勿論、小屋場へ

も罷出候儀二付、先規見合茂無之、御扶持方

全出格之訳を以被下候儀二有之、此度御普

請二付而者、右体之勤廉無之申立方不都合

二而、辻茂難相整筋二付、彼是勘考中之処、先

日申上候通、武家普請還り(懸)のもの共、扶持方も

当分相止ミ候旨、所司代方達有之、尤

公武御差別者有之候得共、連行諸向方通勤

主役御用掛り之もの共辻茂、扶持無之儀旁

願之趣者、不被及御沙汰方哉与奉存候、左者

当節御用多之折柄、今般御普請二付而者、御

用掛被仰付、御庭境高見隠・板囲・仮御廊下

等取建方、新規御遣水筋付替、仮御湯殿取

解等、御手沙汰掛り二而取計候付、右取(連)□中

日数丈々、修理職三人江一个日米壹升宛、下

役式人ツ、一个日米五合宛、為加扶持御飯米

之内方被下、且当正月以来修理職加勢下役

等、御場所板囲御内庭之方夜廻り相勤候付、

連夜相廻り候もの人数限り、加勢上役江一

个夜米壹升宛、下役江米五合宛、是亦為加扶持

御飯米之内方被下置候ハ、以後勤向之励

ニ茂罷越可然哉与奉存候、右二而思召茂無

御座候ハ、夫々被仰渡、尚勤日数書付之儀

「(49才)

者、修理職方私共江差出候ハ、御賄頭江為
取調渡方為取計可申哉与奉存候、依之別紙
願書返進仕、此段相伺候事、

十月 松平若狭守

十一月十一日

一、御築地艮隅御取広御場所御遣水筋付ケ方

之儀者、追而御普請懸り方伺絵図面之通二而

御差支無之旨申付候処、

准后御殿御構境式越堀御取建二就而者、御

在来雨落溝を此度御遣水筋二相成候而者、

溝幅狭く且御庫と溝筋之間狭少二而、式越

堀御取建二而も差支可申、旁別紙絵図朱引

之通付替相成候様仕度、左候へ者、自ラ水行

捌方宜敷、式越堀御取建之御都合二も可相

成与奉存候二付、此段奉申上候、

但し雌黄引之御遣水筋、墨引元御築地雨

落溝等、仕理ミ仕度奉存候、

右之通図相済、宮内伺出候間、付于飛鳥井中納

言拝伺候事、

十二月廿二日

一、依無服殤、御用掛以右少弁通房御理申入

候処、小時被聞食旨也、

廿三日

一、今日出仕二付参番候処、議奏加勢日野大納

言被招、御用掛被仰出旨被申渡、御受申上了、

一、御普請之内、二筋廊下年内出来之筈之処、白

土当年中出来兼候間、其尽二而仮引渡并御

「(49才)

「(51才)

「(50才)

「(51才)

手沙汰ニ而白土掛候様願出候間、其旨御内

儀へ野宮被伺候処、御指支不被為在ニ付、来

廿六日仮引渡之旨、從武辺申越候間、修理職

へ可申渡、前同卿被噂候、即職坪田へ令下知候、

右引渡之節奉行参仕之儀相尋候処、不及其

儀職□ニ而旨ニ候事、

但来年土乾候ニ上白土掛候様、是又申渡

候事、

右之通武伝野宮被申渡様奉行へ申遣了、

「(53才)

「(52ウ)

以下、『(一) (二) (三) (四)』ハ各一通ヅ、ノモノニテ本

冊ニ挿入シアリタルモノ也、(○欄外書入)

『(一)』(○朱書)
天保七年九月十四日

一、車寄御修復ニ付以諸大夫間車寄代、從今朝

昇降鶴間西北角襖明ヶ屏風仕切有之、諸大夫

間西北方障子開有之、非藏人^{端内々・外}様相混、

間辺相詰居^{鶴間北廊下西、角辺ニ候}、尤参宿相揃次第車

寄代へ切迄詰、

一、平唐門昼夜開有之ニ付、諸大夫間庭南之方ニ

平唐門代板囲有之、車寄代へ切迄平唐門内ニ

警固有之、

『(二)』(○朱書) 御剣・御鞘・御太刀拵御用聞上田屋佐兵衛御用召

放之儀ニ付、当五月中委細御剣奉行衆江申上候

処、尤ニ相聞候得共、上田屋儀者從來御出入御用

勤来ル旧家ニ候得者、当時難渋御用不被仰付

候共、御出入之廉御憐愍を以中絶ニ不相成様、

倅江御出入可申付置旨被仰聞候ニ付、猶厚勘考

「(53才)

いたし候処、右様難渋御用難相勤者江引続御出

入計り申付候儀者容易ニ取計兼候儀ニ候得共、

被仰聞候趣も難点止奉存候ニ付、此度佐兵衛儀

先年不埒之訳を以御用召放、即日旧家之儀格別

之御憐愍を以倅江御出入計申付候様取計可申

与存候、右者一体御出入之もの御取締ニも拘り

候儀ニ付、小栗下総守江茂彼是及談判罷在、御答

延引相成候間、此段御剣奉行衆江御申上有之候

様致度存候事、

八月

卷首余白ノ
裏面ニ記入アリ
松平若狭守
遠山隱岐守

『(三)』(○朱書)
今般

東宮御殿御絵御用被仰付難有奉存候、然ル

処是迄取扱方之義御造営且御修復等外絵師江

御用之節取扱方私共兩人江被仰付相勤来罷

在候儀ニ御座候間、何卒今度も同様取扱儀被

仰付被下置候様仕度奉存候、右之趣宜御沙汰

奉願候、以上、

九月 土佐備前守

鶴沢探真

『(四)』(○朱書) 来十九日小御所・御学問所等御取置御延引日限、

追て御沙汰候也、

十二月十七日

来廿一日常御殿御煤払御延引日限、追て御沙汰

候也、

十二月十七日

「(53ウ)

「(54才)

「(54才)